

クンブ、ティンリー両地方の生業空間編成 —家畜種構成からみた伝統と変容—

月原敏博

京都大学文学部

古川 彰

中京大学社会学部

ネパール・クンブ地方のナムチェは交易依存度が歴史的に一貫して高い村ながら、その経済の基底にある農耕・牧畜の重要さは他の村々とも共通している。それゆえ特定の家畜種を大きな軸にして展開したナムチェとクンブ地方全体の生業変遷は、ティンリー地方などヒマラヤ北面との交流ぬきには理解しえない。このことは第1号でも主張した。しかし実際には、前稿執筆当時はナムチェ以外のクンブ諸村もチベット・ティンリー地方もまだ調査してはおらず、文中での言及のもととなったそれらの地域に関する認識も既存の研究に多くを依存していた。1990年には、ラチュー村短期調査を中心としたティンリー地方の踏査と、ディンボチェ、パンボチェ、クンデなど、ナムチェ以外のクンブ諸集落の調査を行った。本稿はこの調査結果に基づいた前稿の論旨の補足強化と発展である。生業戦略を、家畜種構成と飼養様式に現れる牧畜の側面から捉えるならば、ヒマラヤ主脈を境に北を「乾燥チベット」、南を「湿潤チベット」として対比的に整理しうるにもかかわらず、伝統的生業の変容過程において両地方の家畜と人を通じたつながりがあったことを指摘する。

1. はじめに

前号の論考に引き続き、牧畜と人の移動を鍵としてヒマラヤ南北の生業の性格を解説したい。世帯や集落の牧畜の性格を見る方法の一つとして、家畜種ごとの頭数規模とその比、すなわち家畜種構成をとらえることがあげられる。家畜種構成は、家畜種自身の備える生理的特性、飼養される土地の気候や植生などの自然的条件のほかに、住民の持つ牧畜関連の技術や嗜好、社会的に限定される牧畜利用地の範囲など、文化・社会的条件にも制約を受けている。またもちろん、生活せねばならぬ住民自身の、家畜をとおしての生業戦略を離れて選ばれるものではない。このように、家畜種構成は自然環境の制約と住民の生業戦略、さらに住民の社会・文化を背景として選択・決定されるも

のであり、環境と人間の間の相互作用の中で結ばれる均衡が、現実に見えるかたちで集約される焦点の一つである。

広い視野からみれば、このような焦点は牧畜のみに限られるものではない。現に、ヒマラヤ南北のチベット系住民の生業は、おもに農耕・牧畜・交易という三部門にまとめうる諸生業の複合からなることが知られており、農耕も重要な焦点と言える。しかし、なぜ特に牧畜に注目することがこの地域の生業全体をとらえる上で適当なのか？

その理由をある程度でも明かにしておく必要があろう。三部門を識別する立場に立ってみれば、チベット文化地域全体を巨視的に見たとき、次のことが指摘できると思われる。山がちな地形によって耕作適地とその規模は限られていたが、それ

を人為的に克服する灌漑路の設置など地形改変の例も大規模なものはほとんど見られず、人の手を入れたとしても可耕地の拡大には限界があった。農耕地とはいえ灌漑、施肥、犁耕、輪作、休閒、栽培作物種の選択的改善などに努めても、作季の延長による多毛化や稲などの高収量作物種への転換は温量の絶対的な不足によってなしえない。それゆえ、一挙に収量を増加させるには可耕地内でも限界があった。よりよい収穫にとっては、細かな農耕技術の一つ一つでは解決できないほど、不順な天候が不定期にもたらす雹や霰のほうが従来よほど大問題であったことが知られている。牧畜は広大な不可耕地の効果的利用の手段として有効な生産部門でありつづけるとともに、農業生産力維持のための犁耕、施肥、脱穀などの用役にも欠かせなかった。利用地の拡大と利用地内での生産強化の限界は、農耕と同じく牧畜にもあったと思われるが、農・牧生産による利用地がある程度拡大すれば、地方を越えた交易によって外部地域と経済的依存関係を取り結び、さらにそのつながりを延長・発展させることで、こうした地域の経済発展をはかることが考えられる。

しかし歴史的にチベット文化地域が外部の世界に輸出し得たものを振り返ってみれば、塩、薬草、鉱物、薬獣、森林産物など多くは自然から略奪したものであり、農牧生産物の占める割合は小さかった。ここに牧畜以外の手段によった不可耕地の狩猟・採集利用の重要性が明かなことはともかく、意義の比較的小さかった農・牧生産物の中でも、羊毛などの牧畜産物の方が農耕産物よりもはるかに重要な輸出品であった。

交易拡大には輸送手段の発達が必要だが、内陸水運は発達しえず、いきおい輸送は人力と畜力に頼ることになり、輸送規模の拡大はいかに多くの輸送畜を揃えられるかにかかっていた。このように、牧畜は一つの生産部門であるだけでなく農耕・交易両部門とも強く関わっており、三部門を有機的に結びうる重要な部門であった。チベット文化地域の住民構成の大部分は、現在でも遊牧民ないしは家畜を飼養するという意味で半農半牧民と表現しうる牧畜兼業農民からなる。つまり大

多数の住民はなんらかの牧畜戦略を選択・実行しているのである。

本稿では、クンプ地方の伝統的生業の変容の大きさは、ヤク牧畜の衰退とヤクと牛の交配種であるゾ利用の拡大という牧畜の相の変化に負うところが大きいという観点にたっている。その観点からヒマラヤの南と北の生業様式や経済空間編成を牧畜と人の移動から捉えれば、両者はかなり異質でありながら、人や家畜、ものの交流でつながっており、そこに意外な空間と社会の対称性があることを指摘したい。

考察の過程では、まずチベット文化地域全般の牧畜の整理を試み、家畜種ごとの特性、遊牧から農耕への農牧民類型、家畜の保有規模の目安を確認する。次いでヤク、在来普通牛、および両者の雑種であるゾそれぞれの牝牝までの頭数構成の世帯別データと、聞き取りによって得た家畜種ごとの飼養様式をもとに、クンプ地方の牧畜の現状を確認する。さらに現状にいたるまでの牧畜の変化や経済・社会の変遷の鍵を握ると思われる、ナンパ・ラ峠を越えてクンプ地方にやってきたチベット人「カムバ」の世帯数の集落差を確認する。最後にヒマラヤ北面のティンリー地方との比較を試み、ヤクとゾという家畜種のもつ意味を考察する。

牧畜の分析のためには、より厳密には家畜の年齢構成や家畜飼養の委託関係にまで分析を広げなければならないが、今回はそこまで踏み込むに十分なデータを持ってはいない。クンプのヤク牧畜の衰退を問題とするにあたって、ここでは伝統的なヤク牧畜を、土地の自然条件にかなった移動様式に従ってヤク群を放牧し、衣食住の消費財としてヤクの肉・乳・毛・皮をより十全に利用しようとする牧畜と捉えておく。

多様な家畜種の中でもヤクをはじめとする牛類家畜を特に選ぶ理由は、羊毛を生む羊・山羊ほどには外部世界への輸出品としての意義は持たなかったにせよ、乳用畜、農用畜、輸送畜として、大多数のチベット系住民にとっての重要性は、羊・山羊など他の家畜にまさっていることがまずあげられる。ヤクは、このチベット文化地域で馴化され、その文化複合の核心がく裸大麦耕作－ヤク牧



写真1 ヤク（去勢オス）

シシャバンマABC(5600m.)1990年5月

畜—キャラバン商業—と一般に捉えられるように、チベット文化との強いつながりが従来指摘されてきた。

チベット文化地域は、文化の諸相ならびに、歴史的背景、社会の伝統的制度・慣習などにおいて、かなりの等質性を有する一つの国家的領域とでも呼んでよい地域であるが、たとえばエクバルは、多様な特性を持つ家畜種によって多様な高度環境を利用し得た牧畜こそが、地形の障害を越えて形成された、この文化地域の広域にわたる文化的等質の基盤として最も重要であることを指摘する¹⁾。また、川喜田二郎は、チベット文化が「低地に降りられない」要因として、これらの「文化とのつながりの深い高地種の家畜が降りられないこと」を示唆している²⁾。これらの問題意識を引き継ぐ意味でも、ヤクをはじめとする牛類家畜の牧畜にポイントをおきながらチベット文化地域をとらえたい。

2. チベット文化地域内の牧畜の整理

具体的な分析に入る前に、家畜種ごとにその生

理に関わる用途や飼養様式に見られる特徴と、遊牧民や半農半牧民の世帯・集落の家畜種構成の実例を確認して、分析のための目安を得ておきたい。以下、聞き取りと従来の研究によって知られることを記すが、問題とする家畜種や牧畜戦略は、特にクンプとティンリーの考察対象地域に特殊なものであるわけでもないので、ヤクなどの牛類家畜に関連するチベット文化地域の牧畜の一般的整理として記述する³⁾。

1) 家畜種ごとの用途・特徴

①ヤク（♂:Yak, ♀:Dri, 牦牛）

ヤクは、牛類家畜であるが、アメリカ大陸のバイソンのような原牛類に属する。長毛の牛であり、チベット文化地域全般において飼養されている。かつては野生ヤクがチベット文化地域内の広域にわたって存在したことは欧米人の残した旅行・探検記などに記録されているが、近年は出現例が減少している。それでもチベット高原北部のコンロン山脈付近などには今でも多くの野生ヤクの存在が報告されている。

家畜ヤクの分布範囲自体は、チベット文化地域を越え、パミールのキルギス族居住地域やモンゴルの一部にまで広がっている。高冷地に適し、ヒマラヤ南面では、おおよそ標高2500m.付近を放牧・移動可能な下限とし、それより低所へ降りると弱ってしまう。このことにもよって、ヤクの分布を決定するのは、乾燥度などよりも温量であろうといわれている。

脚部の関節の構造などは、水牛に似て湿地帯を歩行するのに都合のよい形質を備えているので、チベット高原のうちでも、標高が高く湿性の草原があったところが本来の生息地だったのではないかといわれる。体重は200～300キロであるが、野生ヤクの方が家畜ヤクよりさらに大きい。

西チベット、ラダックのギャ村（4100m.）での聞き取りによれば、交配期は7～9月、妊娠期間は牛類一般と同じく約9カ月、泌乳期間は3～6カ月とのことである。牝ヤク（リー、ディー）の乳量は7～9才の時もっとも多く、最大一日5～6リットル程度と聞いたが、一般に、ゾや在来牛より少なく、一日1リットル程度というのも普通である。ただし、乳脂肪分の含有率は三者のうちもっとも高く、チベット文化地域全域でバターはヤクのものが最上とされる。肉も同様である。毛は刈り取られるのではなく、間引きするように引き抜かれることが多い。毛の加工品には、テント、カーペット、衣類などがあり、皮の加工品として、靴、ローブなどがある。

一般に種牝以外の牝は去勢され、荷運びと肉用に飼養される。ヤクとは本来この去勢牝に当てられた名前である。運ぶ荷の量は50～100キロにも及ぶ。チャンタンと呼ばれる高原中央部の遊牧民は野生ヤクと家畜ヤクの交配をもくろんで優秀な家畜ヤクの獲得を図ることが知られ、河口慧海は、ヤクにも標高に従って野生ヤク（ドン）一半野生ヤク（ドンヤク）一家畜化されたヤク（ヤク）という序列があったとしている⁴⁾。ヤクは臆病な動物で横並びに散開して歩く傾向があり、扱うのが難しい。荷運びのキャラバンをつくるときは、二、三人でも10頭程度を扱っているのが普通である。ティンリー地方の住民によると、放牧の時にも三

人で80頭が限界であるという。なお、馬・驢馬を加えた大家畜全体のなかでも降雪・寒冷に最も強く、冬季、幼畜は露天の囲いや小屋に入れて保護されることもあるが、成畜は夜でも野外におかれて問題なく、降雪の中で眠ることや、凍土に固着した枯れ草など深雪の下から掘り起こして食べることさえできる。ラダックの牧畜専門家の話によれば、農村近くで舎飼して飼料・衛生環境を整えたとしてもヤクは弱ってしまい、乳や肉の質も悪くなる。この意味でヤクは定着畜産の対象にはなり得ない。人間の用意した飼料ではなく野外放牧での自由な嚙草を主とし、高山放牧地などを季節に従って移動する飼養様式を必要とする。一般に農村の近傍に滞在するのは冬季に限られ、例外的に夏季に見られる場合でも、犁耕・脱穀・搾乳などの目的で、一時的にしかもごく少数の頭数が降ろされていることが普通である。

②在来牛（♂:Lang,Langto,♀:Bamo,Pamo,Bachu, Balang、西藏黄牛）

農耕地帯でさえ大半が標高3000m.を越えるチベット文化地域に飼養される普通牛は、もともと中国の黄牛が持ち込まれたものではないかといわれる。身体は小さく力も弱い。一般に牝の用途たる犁耕用の牽引畜や輸送畜としてはほとんど用いられないのに、チベット文化地域では農耕地帯の家畜の中にしかみられない。体重は150キロ程度以内と思われる。乳量は一日1.5～4リットル。農耕地帯の住民が搾乳目的に少数を飼養する例がほとんどである。乳脂肪分の比率はヤク・ゾに比べて劣り、バター、チーズなどに加工されるにいたらず茶に混入して飲まれるだけというのも普通である。乳だけでなく肉も最も劣るとされ、ほとんど食用にされることはない。乳と肉に関して、ヤク・ゾー牛の順に住民の評価が下がることは、チベット文化地域全般に共通する。牝の場合は利点が少ないが、ゾの交配を目的に飼養されることがある。

冬季、夜間は家屋の一階や屋根のある家畜小屋への収容が必要である。冬季飼料の事前確保も必要である。すなわちヤクとは正反対に野外放牧のみに頼った飼養はできず、農村での定着畜産に適

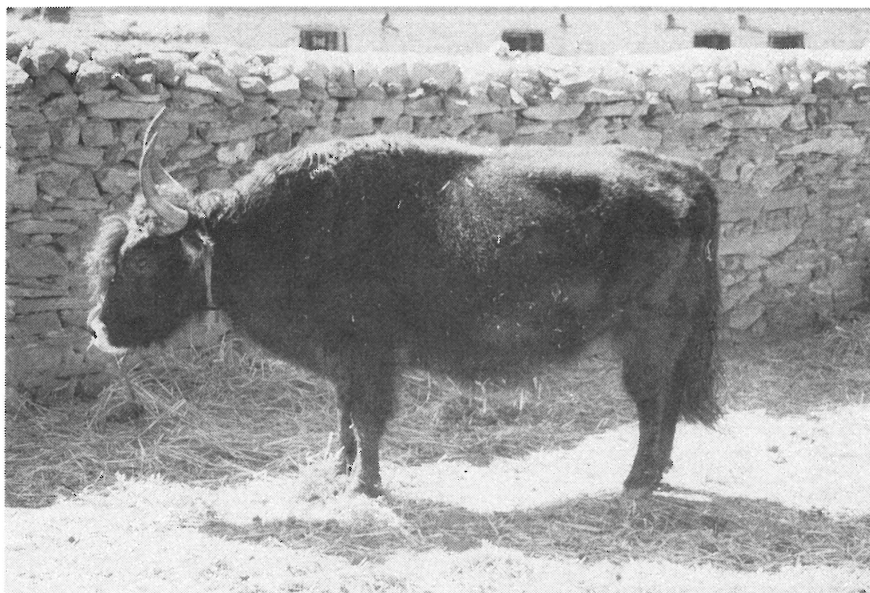


写真2 ゾ (ディム・ゾ、オス)
シムドゥー・デチェン村 (ヤルルン谷、3750m.) 1989年3月



写真3 在来牛 (メス)
タマロン村 (カンパ・ラ峠北麓、4300m.) 1989年3月

した家畜である。季節を問わず農耕村落からの日帰り放牧が一般的であるが、その際扱える群れの数は、ひと2人で140頭ほどである。

なおネパールの中間山地の山地牛などのように、チベット高原周縁部では標高3000m.以下、特に2000m.前後にまで標高を下げると、中国黄牛やインド牛とも、チベットの在来牛とも違う普通牛が現れる。これには地方的変異がたいへん大きく、それをまとめることは容易ではないが、標高・地方に従って微妙に異なる種が分布し、それがゾなどの雑種交配に用いられる場合があることを指摘しておきたい。この例については後述する。

(3)ゾ（♂Zo, Zopkiok, ♀Zomo, Zom, ~~ゾム~~牛）

ゾはヤクと牛の一代雑種である。これ以外の呼称を用いるところもなくはないが、ほぼチベット文化地域全体に共通している。この呼称の共通性はヤクでも同じである。チベット文化地域のなかでも、特に周縁部でのすぐれた交配例や、かなり多くの農耕地帯で飼われていることが報告されている。ただし農耕地帯ならばどこでも見られるというわけではなく、この点は牛でも同じである。たとえばラダックのギャ村では、半農半牧でヤクも牛も保有しながらゾは含まれないし、ブータン西北部のルナナでは同じく半農半牧ながらヤクのみでゾも牛も保有しない。地域によってゾの交配に用いられる在来牛には違いが大きいはずなので、実際は遺伝的にかなり変異があるはずだが、ゾとしての諸特性自体は変わらない。雑種強勢によって身体が大きく力が強いが、ヤクほど臆病ではなく扱い易い。体重は300キロ弱で、飼料の消費量は牛の二倍程度である。ヤクにあった長い毛はかなり短くなる。

牝の場合は輸送・牽引に用いられる。標高5000m.を越えるような高地に関してはヤクよりも弱い。ただ逆に、農耕地帯などヤクに余り適さない標高に下ると、様々な面で十分ヤクの代わりを果たせるのでよく利用される。

牝の場合はヤク・牛よりも乳量が多く、一日5～7リットルも出すが、乳脂肪分の割合ではヤクには劣る。泌乳期間は牛類一般と同じく、6～7

カ月である。肉についての評価や寒冷・標高への適応力については、ヤクと牛の中間である。一般に農耕に携わらないで高地の放牧地をめぐって生活する遊牧民の家畜の中にゾが混じることはないが、農耕地帯に近い夏の高山放牧地では、ヤクと一緒に放されるのを見ることがある。こうした放牧地は遊牧民のものではなく、耕地をもつ半農半牧の集落の夏放牧地であるのが普通である。ゾはヤクの群れに含めて放牧することも不可能でなければ、牛とともに恒常的に農村近傍に止めおいて飼養するのも可能である。つまり移動牧畜か定着畜産という飼養様式においても、ヤクと牛の中間に当たる。冬季の飼料は牛と同様に必要である。

標高・寒冷への適応力については、牝牛を母とするバム・ゾと、牝ヤクを母とするディム・ゾには違いがある。小林茂の指摘するように、ディム・ゾの方がより高所に適し、バム・ゾはより低所に適する⁵⁾。高地への適応力の違いに応じるように、ディム・ゾは一般に少し毛が長いのに対し、バム・ゾは短い。クンプ地方の場合、クンデ、パンボチェなど標高3800m.以上ではディム・ゾがほとんどであるのに対し、ナムチェ（3400m.）以下ではバム・ゾが増えてくる。

なお、小林茂はネパールヒマラヤ全般において、両者の分布境界はおおよそ標高3000m.であると整理してはいるが、ラダックの農耕地帯一般（2800～3600m.）や西北雲南の徳欽付近（2300m.～3500m.）では、ほぼすべてバム・ゾでありディム・ゾは例外的であったので、この境界高度には地方差があり、特にヒマラヤ南面などよりもだいたいぶん乾燥したところではそれが高くなるように思われる。集落や地方ごとに、ディム・ゾとバム・ゾのいずれが主となり、しかもそこで牝牝のどちらに力点がおかれるかについては、筆者等の観察した限りでは地域によって一定の支配的なパターンがみられ、この選択にはその地域の自然環境の制約以外に、同じゾでも牝牝異なる用途をいかに利用したいのかなど、牧畜生産のみならず生業戦略全般が絡んでいる。

ゾの交配や交易がなされるのは第一代目のもつ有用性のゆえにほかならないが、その有用性を世

代を越えて固定することはできない。一代目の牝は不稔であるが、牝は妊娠して子を生める。生まれた二代目には一代目ほどの利点はなく、特にその牝は生まれてまもなく死んでしまうことが普通だが、殺されることもある。牝の場合は生きのび、その後引き続きヤクか牛のどちらかがかけ続けられ、ヤクまたは牛への戻し交配がなされるのが一般である。「戻し」の代を重ねるにつれ、生まれてくる牝も不稔でなくなるが、かりに牝牝ともに十分純血に戻らないままゾの交配に用いられ、あるいは純血種との交雑が自然に起こったりすれば、通常より劣った特性しか持たないゾや純血種しか生まれないときがある。このように、ゾの利用にはそれがヤクや牛の中に混じることによって生じがちな危険があり、二代目の牝を殺すことや、二代目以降牝にはヤクか牛どちらかの牝をかけ続ける戻し交配は、それを避けるための遺伝管理技術にはかならない。

百分率で(ヤク・牛)の遺伝的比率を示せば、一代雑種のバム・ゾ、ディム・ゾは(50-50)だが、それにヤクか牛の牝が六代目までかけられる場合、各々の遺伝的比率は理論上図1、図2のような場合分けが想定できる。この交配系統図では煩雑を避けるため牝は二代目までを記入するのみで各代の牝を中心に表現した。当然のことだが、「戻し」によってこそもっとも早くより純血に近いものが獲得できること、それを行わなければ様々な中間型ができてしまうことは、この図によっても再確認される。

クンプとラダック、西北雲南で聞き取った交配系統と呼称の実例は図3、4、5に示すとおりである。ナムチェで聞き取った例では、ディム・ゾから牛に戻され、4代目の牝になると牝ヤクとかけあわされて、引き続きバム・ゾがつくられる交配系統が示されている。どの場合も、図1、2のごとく多様化しうる個々の中間型に対して、識別呼称が与えられているわけではなく、その地方で支配的な「戻し」の系統に沿って、五代目くらいまでの呼称があるのみである。しかもその五代目(純血度96.9%)位になれば、ヤクまたは牛に「戻った」とみなされ、呼称も再びヤクや牛と同じに

なる。

ゾの二代目以降の交配系統と呼称に関するこうした傾向は、従来各地で報告されている諸例にも適合するので、チベット文化地域のゾ飼養には、好まれる「戻し」系統とそれに沿った各代の呼称が付随することは一般的かと思われる。

既述のように一代雑種には大別してディム・ゾとバム・ゾの二つがあり、いずれも(ヤク・牛)の遺伝的比率は(50-50)であり、この一代目から「戻していく」系統には、ヤク・牛の二系統がそれぞれ考えられる。このため支配的たりうるゾ交配系統には四つ(図1、2のうち太い線で示したもの)があり、そのうちのどれかが地域の事情によって選ばれれば、各地のゾ交配系統をこの四系統のうちに整理しうる期待がもてる。

しかし、これだけでは実は十分でない。それは、ゾ交配のための親である牛にも、標高や地方によって微妙に異なる種類があることによる。在来の交配方法の中にも、チベット高原とその周辺域の在来牛ではなく、さらに低地の牛が用いられ、このときには高地の牛を用いる場合とはまた幾らか異なった優れた特性を持つゾが生まれ、それが一毛作帯の高地集落でも珍重されていることがあるのである。その例として筆者が知るものには、クンプ地方のウラン・ゾとラダックのジャルシー・ゾムがある。ウラン・ゾの場合にはネパール中部山地の山地牛を親とするが、在来牛からつくられるディム・ゾやバム・ゾのもつ移動・滞在可能な標高限界が突破され、またそれらより「頭がよい」ことなどが指摘される。またジャルシー・ゾムの場合は乳が大変多いという利点をもつ。ジャルシーは英国から持ち込まれた種で、北インドで広く飼養されている種である。聞き取りによれば、ヤクとの交配のために、たとえばインドや中国の平原部にすむ牛を強引に高地に移動しても、「高度障害」が生じて親畜の生存自体が危ぶまれるのが普通である。しかし、カトマンズ盆地やカシミール盆地など、標高2000m.前後の、ヒマラヤ南面でも中間山地の牛ならば、この危険は十分回避できると聞く。

図1 ディム・ゾからの交配諸系統

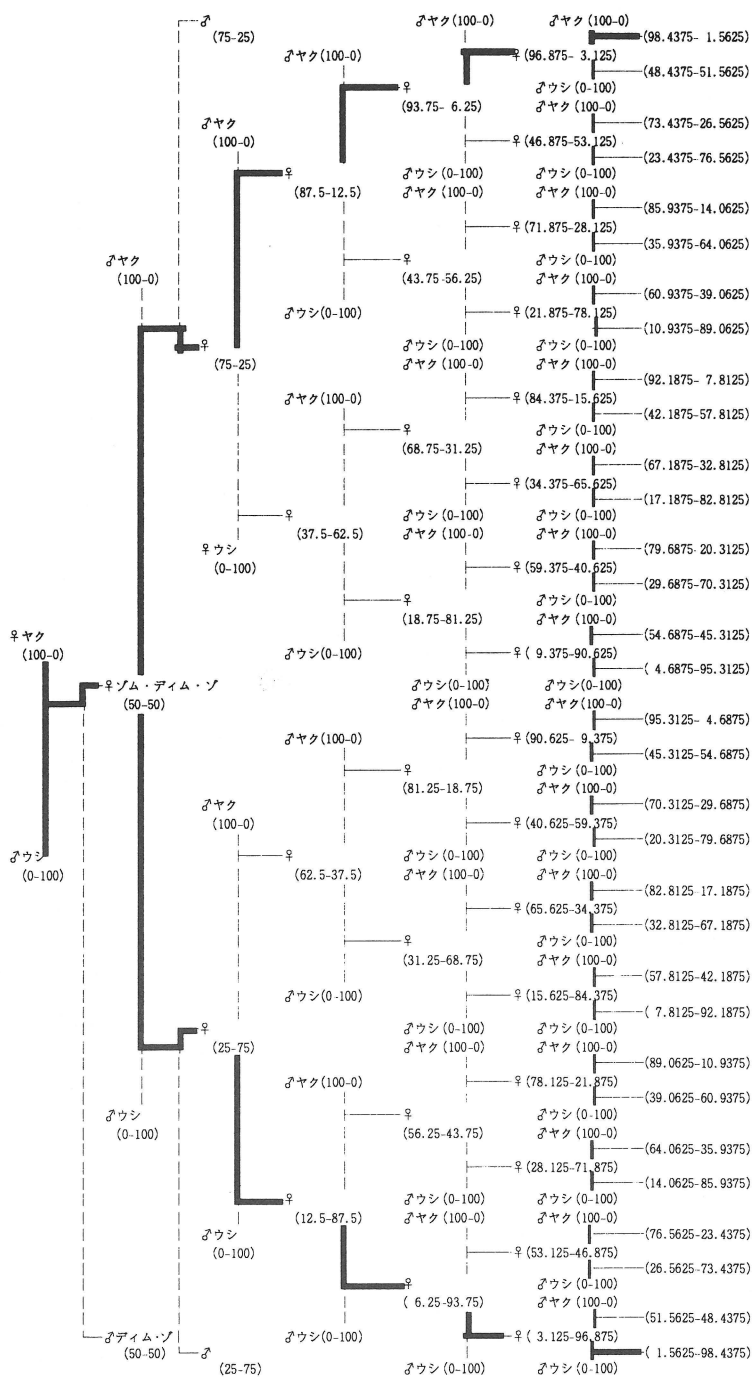


図2 パム・ゾからの交配諸系統

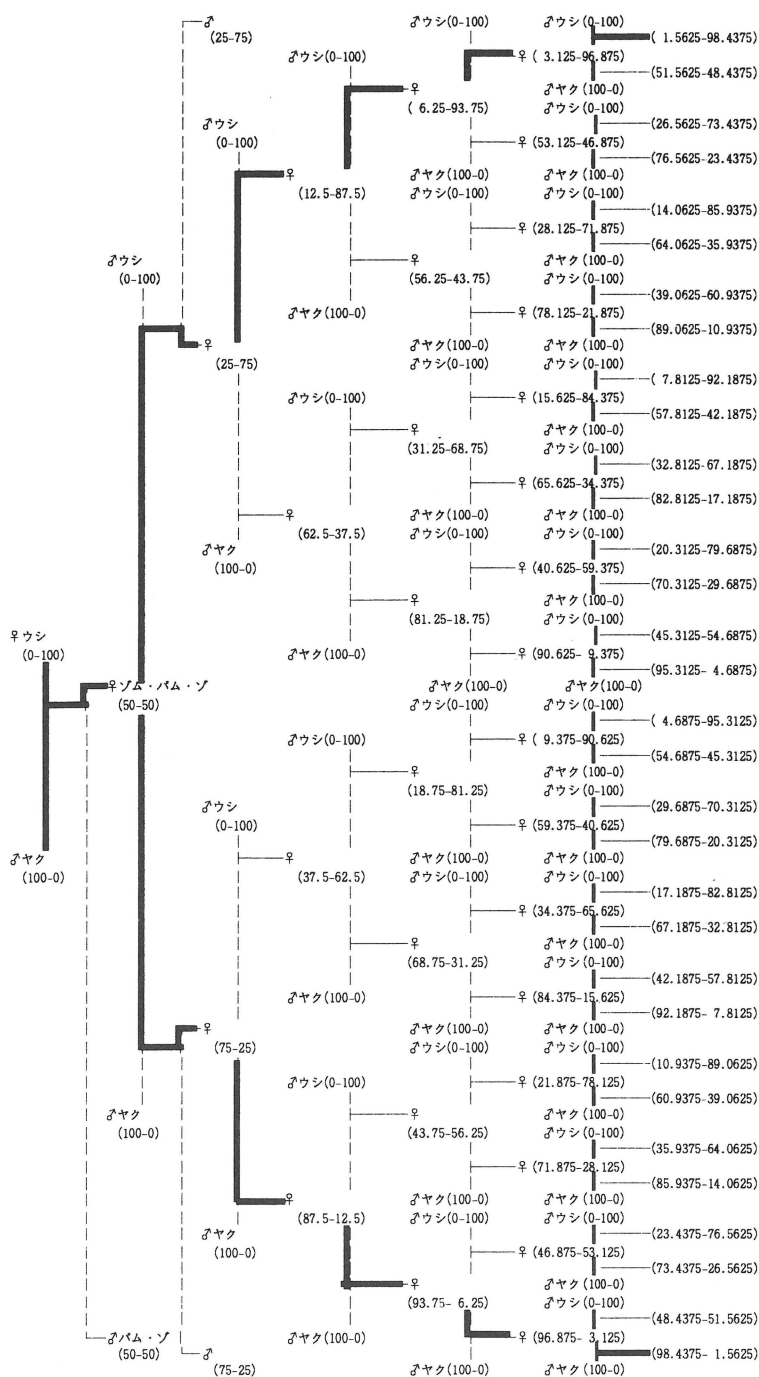


図3 クンプ地方ナムチェにおけるゾの交配系統

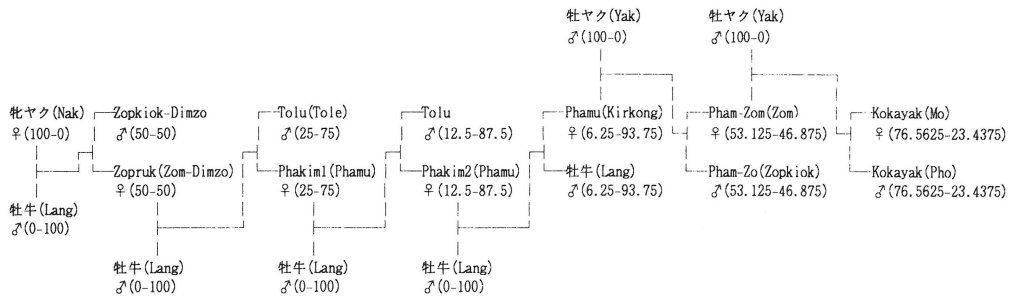


図4 ラダック一般におけるゾの交配系統

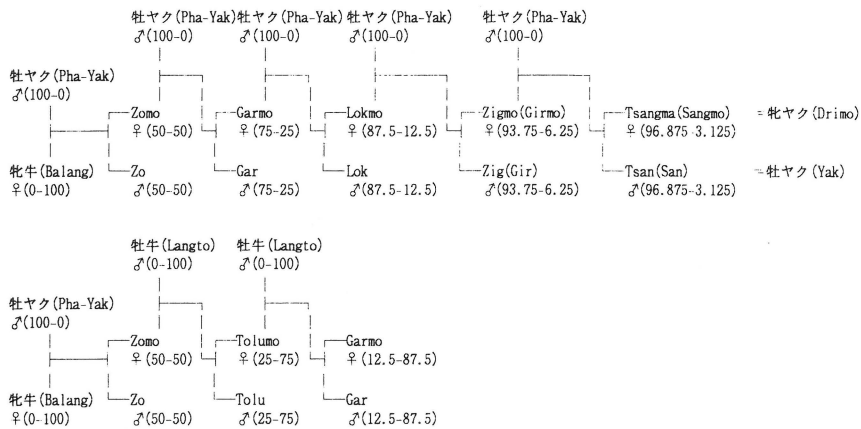
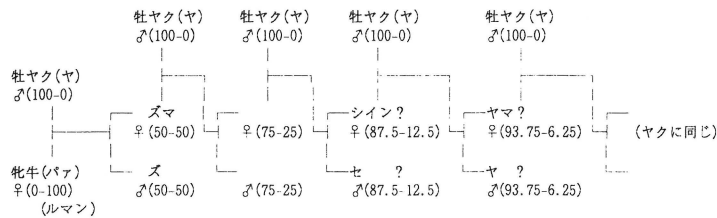
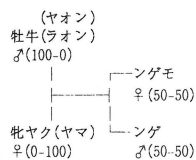


図5 西北雲南徳欽付近におけるゾの交配系統

真牦牛の場合



假牦牛の場合



④山羊(Ra)・羊(lug)

一般に羊や山羊は、牛類や馬などの大家畜に比べて乾燥したところでの飼養に適している。チベット文化地域内の山羊・羊の分布、さらに家畜種構成の中で牛類家畜に対する山羊・羊の割合も、個々の地域の乾燥度にかなり対応している。乾燥の激しい西チベットや中央チベットでは羊・山羊が多いのに比べ、湿潤な東部ヒマラヤ南面や東チベットでは比較的少ない。

ブータン西半部のリンシ・ラヤ・ルナナの各地方のように、半農半牧民の飼養する家畜種がヤクなどの牛類に占められ、羊・山羊がほぼまったく含まれないこともある。羊・山羊にも(遊牧地帯の)高地種と(農耕地帯の)低地種のあることが知られている。カシミヤ・シヨールの原料となる毛を産することで有名な、ラダックなどの西チベットのバシミナ山羊も、ヤクと同様舎飼いなどによる農耕地帯での定着畜産には不向きな高地種であると聞いた。

ダースが彼のチベット語辞書にラサ(神・地)の古名はラサ(山羊・地)と記していることに象徴されるように、中央・西チベットの農耕地帯では山羊が多い⁶⁾。一般に、山羊・羊からの搾乳はしないが、中央・西チベットではこれらからの搾乳をも行う例がある。輸送畜に使う点も同様である。乳量は、一般に1リットル弱であるが、中には2.5リットルと聞いた例もある。山羊と羊は他の農牧混交地域で放牧される場合と同じく混群放牧されるが、扱える頭数は、犬1匹とひと1人でおおよそ、200頭が限度である。

2) 農・牧生産による住民類型

これまでの記述のなかで、すでに「家畜を飼養するという意味で半農半牧民と表現しうる牧畜兼業農民」、「農耕に携わる住民」などと、まわりくどい表現を用いたり、説明もなく「遊牧民」と記したりした。本稿では、住民の多くが農・牧生産双方に関わるチベット文化地域で、農・牧それぞれの力点のおき方の幾らか微妙な違いを問題にする関係上、農・牧生産によった住民類型についても整理しておきたい。

チベット高原の面積の大部分は、標高約5000メートル以上の湖沼の多い荒涼とした高原からなり、その間に、ヤル・ツァンボ川などのつくる、河床高度3000メートルを越える低地が横たわっている。おもに、前者は遊牧地帯、後者は農耕地帯になっている。こうして、標高や地形にほぼ従うかたちで利用空間が展開するため、住民の生業もおおよそその変化に従って牧畜から農耕へと力点を移す。農・牧生産への力点のおき方に従って住民を識別する一般的用語法に従うならば、上から遊牧民—半農半牧民—農民というように、住民のタイプが漸移するのである。さらに既述のごとく家畜種ごとに適した標高・乾燥度のあることがそれに絡んでおり、これらの住民類型それぞれに、保有されることの多い家畜種が知られている。

いま「農民」と記したが、その多くは、実は半農半牧民とも呼ぶことのできる人たちである。チベット文化地域の農耕地帯に住む「農民」は、一般に荷役や乳・肉利用のために牛や山羊を飼っており、しかもたとえ村落付近での日帰り放牧程度であっても、群れとして共同管理などするほどの規模があることが一般的で、農民が集まって共同の牧民を選出したり、輪番するなどして、家畜の世話を特定の牧人にゆだねることも普通なのである。

「解放」以前の推測でも、その後の統計でも、人口を農民と牧民に二分して捉える時に、農民の比率を6分の5以上とか90パーセント以上としている例があるが、これらは半農半牧民を農民の中に含めているのである⁷⁾。真偽はともかく、エクバルは、二分してとらえるならチベット人の約半数は牧民であると主張している⁸⁾。

以上のような住民類型や、それと飼養家畜種との対応に関しては、河口慧海、楊仲華、エクバル(R.B.Ekval)、パルミエリ(R.P.Palmieri)など、チベット高原各地を訪れた者によって報告された例がある⁹⁾。参考までに、引用または解説をしておく。なお報告者たちは、それぞれ以下の地域の現地観察経験を持っている。

河口慧海 ネパール北部、中央・西チベット(ウ、ツァン、ガリの各地方)

楊仲華 東チベット(カム地方=旧西康省)

Ekvall 東北チベット（アムド地方）
Palmieri ネパール北部高地（Solu-Khumbu, Lantang-Trisuli, Kali Gandaki）

まず河口慧海は次のように記している。

「・・・これらの牧畜民を分かつて三種とす。遊牧民、定住牧民、半牧民とす。

遊牧民はその名の示す如く、一処定住の家を有せず、天幕を有し水草を逐うて牧畜するものなり。これらの人民はチャンタンと称せらるる高原に住す。

彼らは水草を逐うて奔るといへども・・・大抵毎年毎月、期に応じて行くところ一定にして、・・・一部落の長ありて、その部民をしてその部落のある牧場における一定期限の期を守らしむ。されば冬季牧民の集まるところは、夏期中は牧畜者をして一もそこに入らしめず。かくして彼らは毎年、月を追うて殆ど同じところを廻れるなり。・・・

定住牧民は一の村落を形作り、石造り、乾土、瓦造り、あるいは芝根造りの家屋を有して、家族中の主婦らはそのうちに住し、主人または牧婢等は天幕を有す。犂牛あるいは羊群、山羊群を引いて遠く水草を逐うて行くことは、また遊牧民のごとし。・・・而して定住牧民の村落の近隣に、耕地に似たるもの多くあるところあり。以上二種の牧民をチベット語にてはこれを区別するところなくして、何れも牧民（トクバ）という。

この耕地は麦を蒔いて、その藁を取って馬草に供するために耕せるなり。これらの地は何れも寒気厳烈にして麦の熟するに至らざれば、ただその藁のみを収めて満足するなり。

半牧民とは半農半牧の人民にして、チベット語にてはこれを農民（ソーナムバ）という。しかれども彼らは、純粹に耕作をこととするにあらずして、半ばは牧畜をこととするをもって、余はこれを半牧民と称せり。チベットの地たるや高原国というといへども、その実は山国にして、平地は実に少なければ、耕地は僅かに山間の溪間あるいは狭き原野にして、それも殆ど一万三千五百フィート以下の地に限れり。

而してチャンタンと称せらるる一万四、五千フィート以上のチベットの大部分の地には、殆ど全く耕地なく、ただ中央と東部において僅少の耕地あるのみ。而してこれらの地方も、大抵山の部分は草地なるが故に農民もまた牧畜をなすの便宜多きが故に、すべての農民は半ばは牧畜をこととするなり。

而して彼ら農民にして牧畜をこととせざれば、羊糞、山羊糞等の肥料をうることを能わざるをもって、彼らはぜひとも牧畜せざるべからず。彼らの牧畜中、数多きは羊にして、山羊これに次ぎ、驢馬もまた多く、牛これに次ぎ、犂牛及び馬に至りては甚だ少なし。」

続いて楊仲華のものをみよう。

「一、牧民の類別、西康各県は地勢関係により、耕牧錯雑している地が多く散在しているが、牧民の間では畛域各々分たれこれを分析して言えば次の4種類に分けることができる。

純粹牧民、此の種の牧民は大概は天幕を張って家屋となし水草を追うて居る。一年四季は牛隊羊群と相伴侶する外は、僅か少数の人が商業を営んでいる。婦女の輩に至ってはその身を終わるまで未だ城市に至らざる者がある。

牛廠の分荘、此種の牧民は大概は地主の類で、土地広大で牛羊の衆多なるにより、附近山中において特に牧場を劃きもって遊牧に資する管理方法は、家人より順番に前往経営するか或いは僕役を雇ってその事を司る。その山中に居住する間の生活の状況は完全に純粹牧民と同じである。

半耕半牧、この種の牧民は農業をもって主とし、その余分の資金をもって牧畜を購買して近方に放牧して、もって牛乳、酥油及び轉輸の利を取る。その牧畜放牧の方法は、多くは早く出て晩く帰って純粹牧民とは同じでなく、秋冬の際は水潤き草衰へ、即ち自分の家で飼養する。

寄養牧民、この種の牧民は広大な牧場を擁有して自分の牛羊放牧の数が少ないなら、附近の農村人民の牛羊及び驢馬類を受収して代わりに放牧する。毎年滋生する小牲、及び酥油の屬は牧民と牲主の間に平等に利益を分配する。これ等牧民は、そのうる利潤は牲主の煩勞を省き実に兩利の方法である。

（中略）

六、牲畜の管理、西康においては牲畜の管理は純粹牧民、分荘牧民、寄養牧民の多くは白昼は牲畜は山野に放ちて・・・（中略）。半耕半牧の民に至っては、馬驢類は、多く棲房の下において飼養し、晩に收帰し朝早く放ちて各々定時になす。秋冬の草の無い時は即ち家で飼養し、毎日早晚二次にわたって附近の溪流のあるところ或いは井泉のあるところに放ちて水を飲ましめる。羊群になると別に羊圈を設け種々に設備をしていて純粹の牧民に較べて周密である。牛群も院落の中に収め外に門牆の隔離があつて夜間の保護も要しないのである。」

エクバルは、チベット高原住民の地形認識であるロン（農耕可能な谷間）とドク（チャンタン高原などの標高の高い寒冷な高原）とが、そこに住む住民の識別にもあてられ、實際その住民の生業に非常によく対応するものだとしている。すなわちロンに住むのが農民（ロンバ）であり、ドクに住むのが遊牧民（ドクバ）である。また、ドクとロンが接する付近では、そこは耕地としては不十分な生産しか得がたいのに引き替え、村より上方は牧畜のかなう高地であるため、農民の一部が牧民化して、双方を併せもつ生業に携わる半農半牧民（サマドクバ：農耕地帯でもなく遊牧地帯でもない）が生まれるとする。エクバルは、純粹遊牧

民の出生率は低く、人口減少の傾向があつて、長いチベット史を通じて農民から遊牧民への人口流動が続いてきたとしている¹⁰⁾。

この社会動態をも含めた説明は、実際にはエクバルが現地経験をもつ東北チベット（アムド地方）の住民の認識と事例からつくられた類型であるが、彼はチベット一般について適応可能だとする。また、サマドクパの特徴は、特定の農村に出自を持ちそこの経済的なつながりを保ち続けること、雑種であるゾを盛んに生産する点で、遊牧民（ドクパ）と異なっているとす。なお、バルミエリの住民類型では、ロンパ、サマドクパはユルバ、ユルマドクパと言い替えられているが、その内容はエクバルとほぼ同じである。

これらの諸報告に現れてくる住民類型ごとに、その持つ家畜種の記述を確認して整理したのが表1である。エクバルとバルミエリの類型はほぼまったく同じであったので問題ないが、河口慧海と楊の類型がそれにあうかどうかは一言ではいえない。

い。記述から読み取れる限り河口の2（定住牧民）はエクバルらの1（ドクパ）の一部のようであり、逆にエクバルらの2（サマドクパ）を河口は3（半牧民）に含めているきらいがある。つまり、中央チベットの谷あいの、ほぼ農耕のみに頼ってヤクなどほとんど持たない「農民」の範疇に、飼料栽培にとどまらぬ農耕を営む半農半牧民すべてを含めてしまっているため、移動牧畜に重きをおく例もありうる「チャンタン近くの」半農半牧民（エクバルのいうサマドクパ）が軽視されている。

また楊の第4類型（寄養牧民）は、牧畜生産への従事ということからすれば遊牧民であるが、エクバルのいう特定の農村社会との結びつきからすれば、半農半牧社会の一部の、放牧に専業している部分に当たるといって良いのかも知れない。それぞれの記述の中では、農・牧への比重のおき方の程度や農・牧の労働分業のあり方、さらに住民類型に対する家畜種の記述には粗密があるため、類型間の細かな一致不一致にこだわっても意味が

表1 チベット文化地域における住民類型とその飼養家畜種の報告例

河口慧海	Ekvall (Palmieri もほぼ同じ)	楊仲華
1 遊牧民 (トクパ) ヤク・羊 ゾはなし	1 遊牧民 (ドクパ) ヤク・羊に頼る ゾは少し 馬は1～3では最多 驢馬はなし (荷役にはヤクを使う)	1 純粋牧民 ヤク・羊 馬
2 定住牧民 (トクパ) ヤク・羊 山羊	2 半農半牧民 (サマドクパ、ユルマドクパ) ヤク・羊は少なく、 ゾ・山羊が多くなる ゾの交配生産が盛ん (1～3の内、ゾが牛群中最多) ゾが荷役に使われる	2 牛廠の分荘 (分荘牧民) 1に同じ
3 半牧民 (農民) (ソーナムバ) 羊・山羊・驢馬・牛 以上は多い順 ヤク・馬は僅少	3 農民 (ロンパ、ユルバ) 驢馬 (荷役) 牛類 (犁耕・荷役) まれに馬 (乗用) 羊 (毛を取る、群れの規模は小) 山羊	3 半耕半牧民 馬・驢馬・羊 牛・ゾ 4 寄養牧民 牛・羊・驢馬

表2 世帯の牧畜の性格と労働配分による農牧民類型

	牧畜の性格と労働配分	土地と居住施設の利用・保有
遊 A牧 民	a ほぼ全員野外放牧に従事 飼料栽培はしないが、野草の 草採りはありうる	ほぼ一年中移動テント生活 冬営地付近に飼料作地なし 冬営地に家屋・採草地を持つ例あり
	b 採草・飼料作も含むが 農耕はしない 多くの成員が年中放牧に従事	一般に冬営地付近で飼料作地を私有 採草地をも私有することがある 冬営地に家屋を持つ場合は多い
半 農 B半 牧 民	c 農耕を含む、 世帯メンバーの半分以上が 夏・冬営地の牧畜にも従事	一般に採草地を私有 世帯で必ずテントか放牧小屋所有 一般に夏営地の一部を私有利用
	d 世帯から夏・冬営地に常駐的 な牧人を出す	冬営地（村）付近に耕地・家屋あり
	e 他家の家畜を含めたうえで、 夏・冬営地に牧人を出す	夏営地は私有地でない時もある
農 C 民	f 他家に頼んで、夏・冬営地に 家畜を放牧してもらう （牧人との契約などによって 搾乳畜も放牧を依頼）	テント、放牧小屋、夏・冬営地の私 有は不可欠でない 一般に採草地は私有可能 一般に夏営地は共有地を利用
	g 夏営地で搾乳畜は放牧しない （搾乳畜は日帰り放牧のみ 牧人への委託）	一般にテント、放牧小屋、夏・冬営 地の私有はない 一般に採草地・飼料作地は私有可能
	h 夏営地で放牧する家畜はない （日帰り放牧のみ）	テント、放牧小屋、営地の私有なし 一般に採草地・飼料作地は私有可能
	i 日帰り放牧もせず舎飼いのみ	
	j 家畜無し	採草・飼料作は自家用には必要なし

ない。しかし、標高を下げるに従って似たような地形の変化があり、遊牧から農耕への生業の漸移が確認され、また前項に確認した寒冷と標高への適性に従うように家畜種も変わることが、チベット文化地域の広域にわたって見られる点に注意しておきたい。また、住民類型に対応するチベット語が示されているように、これらはチベット人自身の認識にも反映する漸移である。家畜種の変化を再度要約しておくと、牛類家畜の場合はヤク・ゾー牛、馬の類では馬一騾馬一驢馬、山羊・羊においても高地種一低地種という具合に変化するのである。

この遊牧民から農民への漸移を、一つのものさしとしてとらえることが可能である。表1の類型例がみなこの漸移を示しながらも細かくは対応しきらないのは観察地域の相違のみにとどまらず、類型化する指標に違いがあるゆえにほかならない。

それぞれの記述が判別の指標として取り上げている事柄には、飼料栽培の有無、固定家屋の有無、労働力の組織と配置、放牧地の所有、畜群の移動性、夜間の家畜収容施設などの諸点が読み取れる。世帯ごとの家畜種構成の実例に基づいて牧畜の微妙な質の違いや変化を問題とする本稿の意図からすれば、この遊牧民から農民への漸移というものさしにはもっと細かな目盛りがほしい。そこで、チベット文化地域に普遍的な、一世代につき一つの婚姻に基づく個々の世帯が、生産手段の保有と生産のための労働配分の基本単位となっているという事実にたちかえって、世帯の行う牧畜の性格と労働配分や、それに対応して経験的に観察される土地や居住施設の利用・保有のあり方の整理を試みた。表2がそれである。

この類型案は、農牧生産のどちらにより重点をおいているかの度合いによって、チベット文化地

域の世帯例を評価するための案である。交易や請負労働といった生業部門は含んでいないが、家畜に関する世帯労働を基準にすれば、貧富を問わず、それらを主生業にするもの達もこの図式に入ってくる。この図式に入らないのは、家畜も耕地も持たず、牧畜労働を行わぬ非農民などのみであろう。A（遊牧民）、B（半農半牧民）、C（農民）の区分は、住民をその居住と移動という側面から分類したときのものであって、一般的な「遊牧民」「農民」「半農半牧民」という用語の使われ方はこれに対応している。つまり、Aは一般に家屋を持たず、ほぼ一年中テントでの移動生活を営むのに引き替え、Cの生活の場所は、一年中耕地と家屋のある村落に集中するからである。Bは移動牧畜にも重きをおき、主家である固定家屋と、放牧用のテント・放牧小屋などの双方に住む。しかし、一般には農民（C）と称される範疇に入れられがちなfからiの例も、実際上幾らかでも生業対象を家畜と作物両方にまたがらせている意味からすれば、太線のように半農半牧民（B）の範疇に入ってもよからう。大多数のチベット文化地域の「農民」はこれにあたる。農耕に家畜のための飼料栽培をも含むならば、bもまた半農半牧民とみなすことが可能である。本稿は、チベット文化地域では、農民においても牧畜戦略は重要であることを問題とするがゆえに、この意味での半農半牧にこだわるのである。

この表のaからjの目盛りのなかで、世帯の具体例がどれに属するのかにあわせ、家畜種構成すなわち飼養される家畜種とその規模構成、さらに移動や家畜の利用のされ方といった飼養様式の実態が明かになれば、世帯ごとの牧畜戦略をかなり正確に判定しうる。またこの表を集落や地方に拡大して用いることも可能であろう。つまり、その下部構成がaからjのどれに属しているのかを知られば、その比で全体の構成が知られるのである。チベット文化地域の多くの農村では、cからeの移動牧畜を行う世帯とfからiの、それを行わない世帯が混在するのが普通であるので、集落そのものをaからjのどれかに強引に位置づけるのは容易ではない。一般的な用語の使われ方でも、B

とC（eとfの間の）の境界は実際上曖昧であることが多い。しかしとにかくこうした農牧民類型の表を用いながら、世帯のみならず集落や地方の家畜種構成を把握することは、河口慧海やエクバルの整理案をより整えるには有効であろう。

3) 家畜の保有頭数

各家畜種の特徴と農牧民類型を確認したが、最後に世帯や集落の家畜種構成の具体例をみて、その規模の目安を確認しておきたい。厳密な基準を設けることは難しいが、世帯という限られた働き手で農牧生産を営むには、自ずと一定の限界があるのだから、比較検討に必要な精度での確認を試みる。

表3は、文献や聞き取りによって得られたクンブ・ティンリー以外の地域の世帯・集落等の家畜種構成の実例をまとめたものであ¹¹⁾。1年ほど前に作成したもので、1990年に調査したラダックの例はまだ入れていないが、ここでの整理には十分役にたつ。表の中の地方区分の項のうち、Cはチャンタン高原、UとTは中央チベット（ウ・ツァン地方）、Gは西チベット（ガリ地方）、Hはヒマラヤ南面、Aは東北チベット（アムド地方）、Kは東チベット（カム地方）を示している。表は上下二つに分かれているが、上の方に入っているのは各地方や集落等のなかで平均的な家畜種構成の例とわかっているものであり、下の方は必ずしも平均的な例かどうか判断できないものである。住民の貧富の項目については、文献の中でそれに関する記述があったものに関して、一応、AからE（富から貧）までの5段階評価を試みて参考に付した。住民の項目は、表2の観点にたって分類している。文献等で読み取れる範囲内で、遊牧民（A）、半農半牧（B）、農民（C）あるいはaからjの判断をした。さてその順に実例を簡単に検討しよう。

まず遊牧民（住民の項A）であるが、これについてはエクバルとクラークが家畜頭数の規模についての目安を残している¹²⁾。エクバルによると、遊牧では口蹄病、多量の降雪などによる冬季飼料の不足から子ヤク・子羊が死ぬことは多く、また

表 3. 世帯・集落等の家畜種構成の実例

地 方	地 名	標 高	住 民	住 宅	家 族 員数	牛 類	ヤ ク	ソ ノ	ウ シ	小 家 畜	ヒ ツ ジ	ヤ ギ	馬 ウ ナ マ	ラ バ バ	合 計	耕 地 面 積	産 量	文 献
A	AMDO		A	A			200-300				数千							Ekval 1968:19
A	AMDO		A	C			100				数百							Ekval 1968:19
A	AMDO		A	D			50				100							Ekval 1968:19
A	AMDO		A	E			20				4,50							Ekval 1968:19
A	KANSI		A	C			7-70(平均35)				平均700							STUBEL 18-21
C	HOR		A				20-50				100-300							レーリと P.110
A	TANGJA	5160	A		5人(2群:8家族)		61				205	36	4					松原 P.167
A	TANGJA	5160	A		3.7人(1群:6家族)		47				280	14	3		55-107			松原 P.167
G	チャンタン全境		A							1	0							玉村 P.82
H	LAVA(BHUTAN)	3800	B				20-50				0							FIELD NOTE
H	LJINAK(BHUTAN)	3600-4100	B				10-100				0	20						FIELD NOTE
T	TSARJA	4150	B	C			13			20						16枚		高山 P.46
T	SAMOD(OMARZE)	3750	B	A	政府幹事 8戸村長250人		100-200				1000-2000		15			100-150ケル		DARGYAN P.58.
U	KHAR	4400	e, f		5人		1-2					10						谷田 P.235
A	TANGJA	5160	A	B			200				2000		11					松原 P.147
T	チュンパ(SHITZE)	5100	A		4人		70				520		8					玉村 P.228
T	ALZHU		A	B			60				200							河口湖海 1:143
T	SKA	4800	A	B	5人		40				300		2					玉村 P.236
A	青蔵湖		A				30				300		10					松原 P.28
A	TANGJA	5160	A				30				100	7	3					松原 P.147
K	CHAMDO		A?				58				25		5					玉村 P.81
G	THARCHEN	4700	A	C			19				200		1					玉村 P.173
T	SKA	4800	A		4人		13				90							玉村 P.240
H	WALJA(NEPAL)	2900	B	A			50											二毛作ノバと委 河口湖海 1:93,95
H	SIE(BHUTAN)	3500	B		6人		109				0							FIELD NOTE
H	LJINSHI(BHUTAN)	4000	B				15-50				?							FIELD NOTE
H	LJINI		B?	B			10-30					平均30						GOLDSTEIN 1980:122-124.
A	日月山		B				20				0		0					松原 P.19
T			f-e	B	8人			2	17		200	100	2	5				DOVNS 1964
U	NEFANG		C	C			4			27						4.5ケル		CHOENEN P.2.
K	KISHU	2270	f		6人		2	4			5	27	1	3		6.4ケル		FIELD NOTE
T	ザンシ(SHIGZE)	3800	f						8	17					2	55畝	20000	玉村 P.242-245.
U	REAO	4400	f		7人						10							朝日 P.75.
H	TONGKSI(BHUTAN)	1500	f		4人				17									FIELD NOTE
U	REAO	4400	f		6人		2			5				2		5400畝	1800キロ	朝日 P.86-88.
U	TRAMALING	4300	f		3人				3									FIELD NOTE
U	ラサの僧侶		f?	A			500						100			100枚		河口湖海 3:68-69.
U	ラサの僧侶		f?	C			50						10			10枚		河口湖海 3:68-69.

* 地方区分は、UとTは中央チベット、Gは西チベット、Hはヒマラヤ南面、Aは東北チベット、Kは東チベットである。
 * 上の家は、各地方や集落等のなかで平均的な家畜種構成の例にわかっているものであり、下の家は、必ずしも平均的な例かどうか判断できないものである。
 * 住民の世帯の項目の現況については、文獻の中でそれに照する照合があったもので、一応、AからEまでの5個階層面を基に参考にした。
 * 住民の項目は、家2の観点によって、遊牧民(A)、半農半牧(B)、農民(C)の分類をした。

口蹄病の蔓延を常に恐れていることから単純に基準を設けるのは難しいが、アムド地方で遊牧に携わって4人家族を養うためには、安全な範囲でヤク100頭程度と羊数百頭を持たねばならない。しかし控えめの計算をするならばヤク50頭、羊100頭足らずでも可能であり、貧しいながら、ヤク20頭、羊40から50頭で何とかやっている例もあったという。

またクラークは、チャンタン高原の遊牧においては、気象変化によって一時的に影響を被っても畜群の数を維持できる規模は、羊300頭、ヤクは60頭としている。表3に実例を見てみれば、例にある遊牧民（住民の項のA）はみなヤクも羊も保有している。食べる草に違いのある羊とヤク双方を含むことによって、草原の効果的な利用をはかっているかとおもわれるが、その比率についてはヤク1頭に対し、羊は2から10頭くらいとかなりの差がある。所有頭数の規模については、まず平均以上の裕福な例（上の表並びに下の表の貧富の項A～C）でみれば、おおよそエクバルの「控えめ」計算にはおさまっている。なかにはヤクの頭数が30頭以下のものがあるが、これらは羊の数で補っているとも考えられる。

エクバルやクラークのあげた必要頭数基準は、現実の平均レベルより少し高く評価されているように思われるがおおよそ現実に適合しているのであろう。普通の遊牧民の生活維持に必要な頭数は、ヤク30～50頭以上に羊200頭以上という程度のようなものである。その倍つまりヤクが60～100頭はあって、羊が300～400頭あるなら、比較的豊かな方と判断して良さそうである。またヤクが30頭をわり、羊が100頭前後を下回るほどであれば、遊牧民としては苦しうである。

クラークは、遊牧民が日常の放牧の際に扱える畜群の規模については、一つの群れあたり、羊なら450頭、ヤクなら140頭が限度だといってもそれほど大規模な群れはチャンタン高原でも見かけないとし、通常、羊は150から200頭、ヤクは50から60頭で群れをなし、複数の者が管理に当たっていると述べている。筆者等がティンリーで聞いた例によると、ヤク放牧での限界となる働き手と群れの規

模は3人で80頭であった。また実際に見たヤク群については、遊牧民ではなく半農半牧民の行う例がほとんどの観察例を占めるが、多いものではブータンヒマラヤのヤンゴタンで110頭程度のヤクの群れを一つのテントの6人家族（老人子どもを含む）が世話していた例があり、同じブータンでも少ないものには、同じく5、6人の家族で20頭以下の例があった。クラークがあげている群れの平均的規模は、おそらくは働き手の労働上の無駄がすくなく効率の良い規模ではないか。少なくとも遊牧民にとってはそうではないかと考えられる。この規模を念頭におくと、中クラスの遊牧民の持つ頭数というのは、ヤクと羊をそれぞれ1群程度をつくるのにちょうど良いくらいの規模であり、裕福になると、ヤク・羊ともに2群は持つことになりそうである。

クラークのいう規模でヤクと羊を各1群世話をするとすれば、羊は放牧中つねにひと1人がついてなければならず、ヤク群は朝夕テント地へ集められて搾乳されるとき以外はひとはつかなくてよいが、ヤク集めと搾乳の時には最低2人は必要と思われるから、つごう3人程度の人手でも手いっぱいになるであろう。

次に半農半牧民であるが、農耕にも携わるのであるから、遊牧民の平均レベルの規模でヤク30～50頭、羊200頭をもつ程度であれば、かなり裕福であっても、働き手が多くないと経営は難しいであろう。表3のなか（住民の項のB）ではこれほど裕福な半農半牧民の例は地主や僧侶の例しかない。

ヒマラヤ南面高地のブータンなどにはヤクを比較的多く持つものもあるが、羊が欠如している。つまりこの表の限りでは、比較的裕福な例でも、自家の家畜のみでようやくヤクか羊の1群をつくり得る程度である。ヤクの頭数が20前後、羊の頭数が数十程度のものは、自家の家畜のみで1群をつくるとすれば、クラークのあげた遊牧民の群れの規模よりはるかに小さな群れとなり、効率が悪くなる可能性も高くなると思われる。

これらがもし遊牧民だとすれば極貧の家畜種構成しか持たない部類となるが、複数の世帯が協力して働き手を出し合って世話に当たるなどすれば

無駄な労働もなく比較的豊かな牧畜産物を農耕地帯でも獲得できそうである。ヤク牧畜に力をいれている半農半牧民社会であるブータン西北部の印象からいえば、貧しく見えるものはヤクが20頭に満たないことが多かったのに対し、50頭ほど持つことの多い一般の世帯は、かなり豊かに牧畜産物を自給できているように思えた。

半農半牧民の中でも、あきらかに農耕中心の「農民」（住民の項のCやf）になると、河口慧海の報告するラサの僧侶の例は一般の世帯の例とは見なせないで除外すれば、表の例の限りではヤクはほとんど持っておらず、あってもわずか数頭である。例の中ではBとC（f）の間は、10頭位のものであるので、所有頭数にして10から15頭がヤクの移動牧畜の限界となるように思える。ヤクに代わって牛が現れ、ゾも加わるが、これらともに頭数は多くはない。

交配・遺伝上の問題があるゾは表の中では4頭が最大であり、牛の最大は17頭となっている。また羊・山羊にしてもほとんどは20から30頭程度までとなっている。200～300頭の例もあるが、この場合はのちに農耕従事と放牧従事の二世帯に分かれ、協力して交易を行うにいたった「サマドクパ」であった。「農民」の場合、多くのケースではもはや数戸程度が集まっても群れをなすのに適当な頭数にはならず、十戸とか数十戸が集まってようやく何群かを構成できる程度となっている。チベットの大部分の農民は、このfからjに属する。ただし、10頭以上牛を持つ場合などには、他の人に放牧を依頼してはいるが牛牧畜には比較的力を入れているように思われ、牝牛を数頭のみしか持たない程度の世帯との開きは大きい。

4) まとめ

以上のように、各家畜種の特徴を確認し、それと住民類型に関する報告例をみ、さらに規模の実例を複合してきた。これによってチベット文化地域の生活世界を想起すれば、標高・地形の変化—農牧様式による住民類型の変化—家畜種とその規模（家畜種構成）の変化という、3つの変化の、垂直的な秩序をもった対応関係が、この文化地域

の全般において成立していることが知られる。しかし、各地方の自然条件は多様であって、農耕・牧畜生産においても、牛類家畜以外の家畜をも含め、さまざまな家畜種と作物種を採用した農牧様式がありえ、その多様な組み合わせの地方内での配置も、さらに多様でありうる。しかし、個々の地方や集落の利用しうる自然条件とその範囲は限られており、それゆえ、各々の地方や集落には、その自然条件にかなない、またその文化的伝統にかなった農耕・牧畜生産の組み合わせや配置があったと想定することは妥当である。

前稿（月原）では、従来の研究にならって、湿潤な東部ヒマラヤ南面高地という自然条件のもとにあるクンプ地方の伝統的生業は、ヤクの移動牧畜に重きをおく半農半牧と想定した。しかし、近現代においては、古くからナムチェで多く保有されその経済の基軸となっていたゾという家畜種が他の村々でも増え、ヤクの移動牧畜の衰退が進行した。したがってゾ飼養の動向は農民化ないしは交易民化への指標たりえ、近現代のクンプ地方の経済の変遷とは、ナムチェを先頭とした諸村が、ゾという家畜に深く関係しつつ、農民化・交易民化を進めることであったと考えることを示唆した。

この章では、家畜種をめぐる牧畜・生業の確認作業を行った。それによってみれば、ヤクからゾという家畜種の変化の示唆するものは、標高の高い高地の放牧地から農耕地帯へと降りること、移動牧畜から移動性の小さな牧畜あるいは定着畜産へと変わること、住民類型では農耕地帯の農民ないしはそれとつながりの深い半牧民へと変わること、である。だから、ヤクからゾへの変化は、全般的にみて農牧民類型の上では農民化への指標として、やはり妥当である。

しかし、この追認のためにだけ確認作業を行ったのではない。家畜種ごとの頭数規模（家畜種構成）の実例に即して、農牧経営を全体的に評価するための規模の目安を得ようとしたのである。それゆえ、ここでは半農半牧民のヤク牧畜の衰退をみる家畜種構成の判定のうえで重要な指標であるヤク群の頭数規模を再度確認して終わりたい。

まず、遊牧民として世帯の生活維持に最低必要な頭数である30～50頭位のヤクをもっていけば豊かな方であり、年中ヤク群の移動につきそう働き手がある。半農半牧の中でもヤク牧畜を重視している世帯といえる。ヤクを持つといっても、20頭以下になれば余り裕福ではない。10頭くらいなら、常時ヤク群の移動に付き添う働き手を出すことには問題が生じると思われる頭数規模となる。ヤク牧畜が放棄される際には、当然のことながらヤクの肉・乳・毛の自給は放棄されざるをえないから、ヤク牧畜と深く関わった文化的嗜好であるはずの、最上品たる肉と乳は失われる。文化的嗜好に反するようなクンプのヤク牧畜の衰退をもう一度あとづけ、前稿を補足強化したい。

3. クンプ地方の牧畜と社会・経済

1) クンプ地方の牧畜の現状

①家畜種構成データと各集落の概要

1991年夏の調査では、調査の基点であるナムチェのほか、クンデ、さらに月原はディンボチェ、パンボチェ、ボルツェへと足をのばし、それぞれの集落で農耕・牧畜を中心とした生業一般の調査を行ったが、今回特に各世帯の牛類家畜種の頭数把握を試みた。このデータの収集にあたっては、調査協力者に雇った二人の友人、ナムチェの Ang Dorji 君とクンデの Dawa Norbu 氏に全面的に依存している。筆者等がなしたのは、疑問のある具体例を問いただして集計ノートの単純な記入ミス等をなくし、家畜種とその構成に関して彼らから学びつつ、こちらの知る他地域の例を示すことによって彼らの関心をも少しでも高めてもらうことにとどまった。

ここであえて村といわず集落といいかえるのには理由がある。クンプで重要な社会の枠としては、森林や耕地（家畜）管理人であるナワを選出するグループや、クンプ・シェルパにとってもっとも重要な祭であるドゥムジを共同運営するグループがあげられる。しかしそれらの範囲が、土地所有とも併せ、空間的整合をもって分割・包括されるわけではない。ドード・コシ流域で行われるドゥ

ムジには、ナムチェ、クムジュン・クンデ、パンボチェ・ボルツェの3グループがあるが、後者ふたつはそれぞれドゥムジの主役たるラワを約半数出す二つの集落に分かれていて、それらは個別に森林・家畜管理のナワを選出している。

さらに重要な特徴は以下にみるディンボチェ集落に見られるように、集落の住居の多くが他集落の住民の副住居で構成されているような事例が存在し、そのことが例外ではなく、さらに牧畜と深くかかわっているという事実である。ディンボチェは、主としてパンボチェ（3840m.約80戸）の住民の大麦畑と副住居がある集落であって、ディンボチェに耕地を持つ76世帯のうち47世帯はパンボチェに主住居を持っている。しかしたとえばクンデに主住居を持つ世帯も8世帯があり、決してパンボチェの住民のみの集落ではない。さらにまた、ディンボチェにしか家屋・耕地を持たない世帯も9世帯あって、別の集落に主住居を持つ人のみからディンボチェ集落が構成されているわけでもない。ディンボチェのナワについていうと、森林管理のナワはパンボチェのナワと同一（現在はナショナル・パークから任命されている）であるが、耕地管理（畜群移動管理）のナワはディンボチェに耕地を持つ者の中から選び出されている。ディンボチェでは独自のドゥムジは行っていない。鹿野勝彦が指摘しているように、特にナムチェ以外の集落では、多くの世帯が、耕地、採草地、副住居を複数の集落にまたがらせており、主たる集落ごとに、一定の生活圏が存在している¹³⁾。

パンボチェの住民はディンボチェ方面の谷に私有地のほかその上流部の放牧地に放牧関係の施設を持つことが多く、ボルツェの住民の場合はその集落の北西に走るドード・コシ左岸流域に、一方クムジュン・クンデはその右岸流域に、同様の利用領域を延ばしている。とはいえそれがとりわけ厳密に言えるわけではない。ドゥムジを行い、ナワを選出する主要な集落を村と呼ぶのは容易なのだが、ディンボチェの例で明かなように、村という表現からは漏れる大小の集落に主住居を持つ世帯も少なくないのである。そこで本稿では村という言い方をとりあえずは避けておきたい。

調査によって牧畜や農耕に関するデータを得たのは、ディンボチェ（4300m.76戸、うち9戸は家屋はなく土地を持つのみ）、クンデ（3840m.60戸）、ナムチェ（3400m.約125戸）の各集落においてである。家畜頭数を把握した戸数は、それぞれ、76戸、50戸、93戸であった。クンデは10戸、ナムチェは約30戸聞き漏らしがあることになる。ただナムチェの場合は、このほとんどは家畜を持たないチベット難民と家族ともども借家住まいをしている使用人（ほとんどはソル地方から来ている）の世帯であり、家畜はほとんど所有することなく、また一般にシェルパ社会の成員ともみなされない。調査結果を表4から表6に示す。そこには、牛類家畜3種を牝牝の別に分けた6種類の家畜の世帯ごとの頭数のほか、家族員数、使用人の数、世帯主のクランなどの関連事項をも付記している。ゾの項目にあるのはゾ、すなわち一代雑種のみである。戻し交配が行われた二代目以降は一代目よりはるかに数は少ないが、牛またはヤクに含めている。

では聞き取りによってわかったクンプ地方の各家畜種の利用の現状をも述べながら、三集落の表を読みすすめたい。上述の理由によって、ディンボチェ集落の例には厳密にはクンデとナムチェの若干の世帯も含まれていて重複があるが、以下の検討は集落という断面で切った集落差や集落の中の世帯差を問題としようとしているのであり、ディンボチェの家畜種構成はほぼバンボチェのそれを示すものと考えて良い。

②三集落の概要と家畜種

各表の下、集落ごとの概要を示す数値のうち六種の頭数合計の値から見れば、家畜種の規模構成には集落によって明かに偏りがある。ディンボチェはもっともヤクが多いのに対し、ナムチェはもっとも少ない。ナムチェではゾの牝が特に多い。ヤク・ゾともにクンデは両者の中間を示すようであり、クンプ地方内でも細かな標高などの違いに従った集落差があることを示している。各集落ともにさほど違いが見られないことは、調査世帯の7割から9割は牛類家畜を持っていること、一世帯あたりの家族員数は平均4.6から5人ほどである

ことであろう。

しかし使用人については、クンデ・ディンボチェではさほど見られないのにナムチェでは半数以上の世帯で使用人を雇っている。これは、すでに前稿で述べた、クンプ地方の観光基地としてあるナムチェの経済事情によっている。他の集落では一般にナムチェの人々よりもはるかに多くの耕地をもつが、旅行ガイド・ロッジ経営・荷物輸送など観光関連の仕事への従事にはナムチェの人々に遅れをとっており、ナムチェの人ほどには金はないのである。現在、これらの集落の人がみんな農・牧中心の生業をしているわけではなく、やはり観光化の影響を無視し得ないが、特に女性達は農耕労働を主とし、ナムチェの女性の労働にくらべ、それが観光関係に費やされることがはるかに少ない。ナムチェの使用人たちは農耕牧畜関連の労働もかなり行っているが、クンデやディンボチェの農耕牧畜はまったく女性達に担われているのである。労働交換を行う女性達のグループの活動（ガロック）が盛んであり、長期的に雇った使用人が必要とされることは余りない。ただし、放牧のために雇われている例があり、それがいく例かディンボチェではみられる。

次に家畜種ごとに集落差を見てみる。表はどれも、上から順に家畜の合計頭数の多い順に世帯を並べてある。牝ヤクの保有世帯数とその率についてみると、ディンボチェ（76世帯中27世帯、36%）、クンデ（50世帯中7世帯、14%）、ナムチェ（93世帯中1世帯、1%）と順に下がるが、もっとも多いディンボチェの場合でも意外にこれの保有世帯が限られている。ただし牝ヤク保有の一つの特徴は、保有する場合おおよそみな10頭以上をもっていることである。ほかの家畜ではこれほどの規模基準はみられない。ディンボチェの全27例の平均は12頭であり、10頭未満の少ない例としては4頭、8頭などの例が合計7例あるのみである。この約10頭という規模が、牝ヤクの保有規模の目安になることは、クンデ、ナムチェでもかわらない。これは、前章で確認した半農半牧民のヤク群保有頭数の例が、一般に十数頭以上であったことにも良く対応している。

表4 ディンボチェの家畜種構成(1990)

家 屋 NO	母 村	父 方 の R U	家 族 内 使 用 人 数	家 族 員 数	牛 類 家 畜 の 頭 数						合 計
					オ ス ヤ ク	メ ス ヤ ク	オ ス ゾ	メ ス ゾ	オ ス ウ シ	メ ス ウ シ	
					yak	nak	zopk	zom	lang	pham	
8	Pangboche	Chuserwa	3	7	4	18	2	3	1	0	28
33,34	Pangboche	Khamba	1	8	4	18	2	2	1	0	27
48	Pangboche	Shanggu	0	6	3	18	2	2	1	0	26
27,28,46	Pangboche	Nawa	0	5	0	18	2	3	1	0	24
37	Pangboche	Rongserwa	0	8	1	15	2	3	2	0	23
1	Khunde	Lhukpa	0	4	2	14	2	2	1	0	21
36	Pangboche	Rongserwa	0	8	4	13	0	3	1	0	21
23	Pangboche	Nawa	0	4	2	15	0	2	1	0	20
7	Pangboche	Chuserwa	0	5	4	15	0	0	1	0	20
5	Pangboche	Sherwa	0	6	3	15	0	0	1	0	19
44	Dingboche	Lhukpa	0	9	2	12	0	2	1	2	19
60	Khunde	Paldorje	0	4	2	12	2	0	1	2	19
50	Pangboche	Shire	0	8	3	12	0	2	1	0	18
2	Pangboche	Paldorje	1	7	2	13	1	0	1	0	17
14	Pangboche	Chuserwa	0	3	2	12	0	2	1	0	17
38	Pangboche	Tibetan	0	2	2	8	2	2	1	2	17
19a	Pangboche	Nawa	0	3	2	8	2	3	1	0	16
26b	Pangboche	Paldorje	0	9	3	11	0	1	0	0	15
66	Pangboche	Shanggu	1	5	2	10	0	2	1	0	15
56	Pangboche	Phinasa	0	4	4	9	0	1	1	0	15
9	Dingboche	Shanggu	0	7	0	12	0	0	1	0	13
52	Pangboche	Paldorje	0	4	1	12	0	0	0	0	13
3	Pangboche	Nawa	0	3	2	10	0	0	1	0	13
32	Pangboche	Khamba	0	3	2	8	2	0	1	0	13
59	Pangboche	Khamba	1	3	3	8	2	0	0	0	13
15	Pangboche	Lama	1	6	2	0	4	3	1	2	12
10	Dingboche	Shanggu	0	4	3	4	0	1	1	0	9
17	Pangboche	Nawa	0	5	3	0	2	3	0	0	8
20	Pangboche	Khamba	0	6	4	0	0	3	1	0	8
18	Pangboche	Nawa	0	10	0	0	2	4	1	0	7
6	Pangboche	Nawa	0	3	2	0	0	2	0	3	7
16	Pangboche	Khamba	0	7	4	0	0	1	0	2	7
63	Khunde	Chuserwa	0	5	3	0	4	0	0	0	7
45	Namche64	Tibetan	4	8	0	0	5	0	0	2	7
54	Khunde	Chuserwa	4	3	0	4	2	0	0	0	6
-	Deuche	Sherwa	2	3	0	0	0	4	0	2	6
-	Pangboche	Paldorje	0	4	0	0	0	3	0	2	5
61	Khunde	Tibetan	0	7	0	0	3	2	0	0	5
35	Khumjung	Paldorje	0	4	0	0	2	0	0	3	5
47	Pangboche	Sherwa	0	3	2	0	0	0	0	3	5
-	Pheriche	Thaktokpa	0	4	5	0	0	0	0	0	5
49	Thukla	Shire	0	4	5	0	0	0	0	0	5
21	Namche	Paldorje	1	8	0	0	0	2	0	2	4
40	Pangboche	Nawa	0	5	0	0	0	1	0	3	4
29	Pangboche	Khamba	0	5	0	0	2	0	0	2	4
53	Pangboche	Nawa	0	5	0	0	4	0	0	0	4
19b	Khunde	Lhukpa	0	5	4	0	0	0	0	0	4
-	Pangboche	Mendewa	0	2	0	0	0	2	0	1	3
68	Pangboche	Paldorje	0	5	0	0	0	0	0	3	3
30a	Pangboche	Chuserwa	0	2	0	0	0	0	0	3	3
31	Pangboche	Nawa	0	2	0	0	0	0	0	3	3
30b	Dingboche	Tamang	0	4	3	0	0	0	0	0	3
39	Pangboche	Shire	0	4	0	0	0	0	0	2	2
-	Pheriche	Thaktokpa	0	5	0	0	2	0	0	0	2
24	Namche104	Chawa	1	7	0	0	2	0	0	0	2
62	Dingboche	Chuserwa	1	2	2	0	0	0	0	0	2
25	Dingboche	Thaktokpa	0	4	0	0	2	0	0	0	2
51	Labuche	Thaktokpa	1	3	2	0	0	0	0	0	2
57	Pangboche	Mendewa	0	5	0	0	2	0	0	0	2
-	Pangboche	Shire	0	6	1	0	0	0	0	1	2
64	Pangboche	Nawa	0	2	0	0	0	0	0	2	2
42	Pangboche	Thaktokpa	0	2	0	0	0	1	0	0	1
11	Pangboche	Paldorje	0	8	1	0	0	0	0	0	1
13	Dingboche	Newar	0	5	0	0	0	0	0	1	1
-	Pangboche	Mendewa	0	4	0	0	0	0	0	0	0
65	Pangboche	Nawa	0	5	0	0	0	0	0	0	0
4	Dingboche	Sherwa	0	1	0	0	0	0	0	0	0
41	Pangboche	Shire	1	5	0	0	0	0	0	0	0
-	Thukla	Thaktokpa	0	2	0	0	0	0	0	0	0
12	Dingboche	Nawa	0	3	0	0	0	0	0	0	0
67	Khunde	Garja	1	5	0	0	0	0	0	0	0
58	Khunde	Shanggu	0	2	0	0	0	0	0	0	0
55	Pangboche	Thaktokpa	0	1	0	0	0	0	0	0	0
-	Tyangboch	Tibetan	0	1	0	0	0	0	0	0	0
22a	Pangboche	Chuserwa	0	1	0	0	0	0	0	0	0
43	Deuche	Sherwa	0	1	0	0	0	0	0	0	0
22b	(Tyangboch)		-	0	-	-	-	-	-	-	0
26a	(Govt. Wate		-	0	-	-	-	-	-	-	0
合計			24	348	105	324	61	67	27	48	632
世帯平均			0.30	4.60	1.40	4.30	0.80	0.90	0.40	0.60	8.30
家畜保有世帯数			39	27	26	30	26	22	22	64	
その平均保有頭数			2.70	12.00	2.30	2.20	1.00	2.20	9.90		
非保有世帯数			37	49	50	46	50	54	12		

*タンボチェ寺院所有の家屋（所有家畜数不明）と
政府所有の小屋は世帯数より除外している。

表5 クンデの家畜種構成

世帯 NO	父 方 の R U	牛 類						合 計	家 族 員 数	家 族 内 使 用 人 数	経 済 階 層
		畜 産 の 頭 数									
		オ ス ヤ ク yak	メ ス ヤ ク nak	オ ス ゾ zopk	メ ス ゾ zom	オ ス ウ シ lang	メ ス ウ シ pham				
61	Chuserwa	many	many	2	4	1?	1	many	5	0	M
55	Chuserwa	5	18	4	2	1	0	30	3	0	R
56	Lhukpa	2	14	2	2	1	0	21	4	0	R
23	Garza	4	8	2	2	1	0	17	9	0	R
39	Lhukpa	2	10	3	0	1	0	16	8	0	R
44	Paldorje	3	10	2	0	1	0	16	5	0	M
47	Lhukpa	2	0	4	2	0	2	10	8	0	M
53	Langkaru	0	0	2	4	1	2	9	5	0	R
37	?	3	0	2	4	0	0	9	8	0	R
63	Shyagung	0	0	2	4	1	1	8	7	0	M
7	Taktokwa	2	0	2	3	0	1	8	4	0	M
5	Paldorje	0	0	2	4	0	1	7	7	0	R
6	Langkaru	0	0	2	3	0	2	7	6	0	R
8	Shire	0	0	3	2	0	2	7	5	1	M
20	Chuserwa	3	0	4	0	0	0	7	6	0	M
13	Tibetan Refugee	0	0	3	3	0	0	6	3	0	R
38	Serwa	0	0	2	2	0	2	6	6	0	M
21	Chuserwa	2	0	2	1	0	1	6	9	0	M
35	Tibetan	2	0	2	1	0	1	6	6	0	M
18	Chuserwa	0	4	2	0	0	0	6	6	0	M
17	Sangung	2	0	0	2	0	1	5	4	0	M
60	Paldorje	0	0	3	2	0	0	5	5	0	R
45	Lhukpa	0	0	2	1	0	2	5	6	0	M
29	Tibetan	0	0	3	0	0	2	5	7	0	R
28	Syagung	4	0	0	0	0	1	5	4	0	M
4	Lhukpa	5	0	0	0	0	0	5	4	0	M
10	Taktokwa	2	0	0	1	0	1	4	6	0	M
44	Tibetan	1	0	1	1	0	1	4	2	0	P
12	Shire	1	0	0	0	0	3	4	2	0	P
50	Shyagung	0	0	2	0	0	2	4	3	0	M
51	Langkaru	0	0	0	1	0	2	3	3	0	R
46	Tibetan(Dokpa)	0	0	1	1	0	1	3	5	0	M
15	Salaka	0	0	2	1	0	0	3	6	0	M
43	Lhukpa	3	0	0	0	0	0	3	4	0	P
14	Taktokwa	0	0	0	2	0	0	2	5	0	M
54	Chuserwa	0	0	0	2	0	0	2	5	0	M
58	Sherwa	0	0	0	0	0	2	2	6	0	M
59	Chuserwa	0	0	0	0	0	2	2	5	0	P
41	?	0	0	0	0	0	2	2	4	0	P
9	Shire	0	0	0	0	0	2	2	3	0	M
42	Tibetan	0	0	0	0	0	2	2	2	0	P
19	Chuserwa	2	0	0	0	0	0	2	4	0	P
26	Tibetan(Yawa)	0	0	2	0	0	0	2	3	0	P
62	Dhokpa	0	0	0	0	0	1	1	5	0	P
57	Serwa	0	0	1	0	0	0	1	5	0	P
52	Serwa	0	0	0	0	0	0	0	5	0	R
24	Lhupa	0	0	0	0	0	0	0	4	0	M
3	Chuserwa	0	0	0	0	0	0	0	2	0	P
16	Shyung	0	0	0	0	0	0	0	2	0	M
25	Chuserwa	0	0	0	0	0	0	0	2	0	M
合計		50	64	66	57	7	43	280	243	1	
世帯平均		1.02	1.31	1.32	1.14	0.14	0.86	5.71	4.86	0.02	
家畜保有世帯数		20	7	29	26	7	27	45			
その平均保有頭数		2.50	9.14	2.28	2.19	1.00	1.59	6.22			
非保有世帯数		30	43	21	24	43	23	5			

現状の世話のされ方を見てみると、牝ヤクの主たる飼養目的は搾乳にあり、そのため人が夏冬の放牧地に滞在する必要がある。牝ヤクは重要な家畜であり、その飼養にあたって世帯の働き手の移動が問題になる点では、クンプもチベット一般の半農半牧のヤク牧畜と同じである。つまりこの家畜を10頭程度持つのか持たないのかが、「移動する」半農半牧であるかそうでないかを定めるという点においてである。というのも牝ヤクの場合であれば、夏の時期高山放牧地に放しておいてときどき確認のためや塩をやるためにおとずれ、常駐しない飼養も可能だからである。

その牝ヤクについてみれば、保有世帯数は牝ヤクより多い。ディンボチエの場合76世帯中39世帯、51%、クンデでは50世帯中20世帯、40%、ナムチエでは93世帯中6世帯、6%という具合にである。しかし保有頭数のほうは逆に最大5頭、平均2～3頭と小さい。この規模は牝ヤクの場合の10頭と比べればまったく対照的である。牝ヤクを持つ世帯はヤク交配のために種牝を確保しているが、現状の牝ヤクの利用目的は、おもに荷運びである。これは、エベレストベースキャンプなど特に標高4000m以上での去勢ヤクによる荷運びである。牝ヤクだけを持っていて牝ヤクを持っていないという事例があるのは、この利用目的からである。たとえば他の種類の家畜を持たないのに牝ヤク5頭を持つ世帯は、登山関係の輸送に使うためにこのような特殊な家畜種構成になるのである。

伝統的なヤク牧畜という意味からすれば、牝ヤクは肉・毛の利用において重大な意義を持つはずであるが、そうした利用がクンプ全体で盛んであるとは思えない。ナムチエでは南方からバザールにつれてこられる山地牛によって牛肉が供給されているし、クンデとディンボチエにおいても、牝ヤク保有世帯に限られる上に保有頭数は5

表6 ナムチェの家畜種構成

世帯	父方のR U	牛 類 家 畜 の 頭 数						合 計	家 族 内 使用 人 数
		オスヤク	メスヤク	オスゾ	メスゾ	オスウシ	メスウシ		
NO		yak	nak	zopk	zom	lang	pham		
24	CHUSERWA	4	15	4	0	0	0	23	8
100	TIBETAN	4	0	6	4	0	0	14	8
17	CHUSERWA	4	0	4	1	0	3	12	7
92	TIBETAN	5	0	4	0	0	2	11	8
14	RONGSERWA	0	0	6	1	0	0	7	4
120	未調査	0	0	4	0	1	2	7	7
64	TIBETAN	0	0	5	0	0	2	7	8
5	MANDEWA	0	0	6	0	0	1	7	3
7	CHUSERWA	0	0	4	0	1	2	7	5
95	CHAWA	0	0	2	0	0	5	7	8
116	THAKTOKWA	0	0	5	1	0	0	6	6
11	TIBETAN	0	0	6	0	0	0	6	5
66	TIBETAN	0	0	4	0	0	2	6	4
117	THAKTOKWA	0	0	6	0	0	0	6	6
12	RONGSERWA	0	0	6	0	0	0	6	6
29	CHUSERWA	0	0	4	0	0	2	6	4
57	CHUSERWA	0	0	4	0	0	2	6	5
22	TIBETAN	0	0	5	0	0	0	5	5
25	TIBETAN	0	0	2	0	0	3	5	5
31	TAKSHINDOK	0	0	3	0	0	2	5	5
56	PHINASA	0	0	5	0	0	0	5	5
4	CHUSERWA	0	0	3	0	0	2	5	5
30	CHUSERWA	0	0	5	0	0	0	5	7
86	CHUSERWA	4	0	1	0	0	0	5	6
101	CHAWA	0	0	4	0	0	1	5	6
45	PALDORJEE	0	0	0	2	0	2	4	9
124	未調査	0	0	4	0	0	0	4	6
76	TIBETAN	0	0	4	0	0	0	4	6
2	THAKTOKWA	0	0	4	0	0	0	4	5
90	SYURE	0	0	4	0	0	0	4	5
1	RONGSERWA	0	0	4	0	0	0	4	4
8	GURUNG	0	0	2	0	0	2	4	5
46	GURUNG	0	0	4	0	0	0	4	5
6	CHUSERWA	0	0	4	0	0	0	4	3
52	CHUSERWA	0	0	4	0	0	0	4	6
103	CHAWA	0	0	4	0	0	0	4	6
105	PHERUKPA	2	0	0	1	0	0	3	5
122	未調査	0	0	3	0	0	0	3	4
126	未調査	0	0	0	0	0	3	3	5
67	TIBETAN	0	0	3	0	0	0	3	4
102	TIBETAN	0	0	3	0	0	0	3	4
74	RONGSERWA	0	0	0	0	0	3	3	7
62	PALDORJEE	0	0	0	0	0	3	3	4
18	GURUNG	0	0	3	0	0	0	3	5
61	GURUNG	0	0	3	0	0	0	3	5
3	?	0	0	3	0	0	0	3	5
119	未調査	0	0	0	0	0	2	2	3
13	TIBETAN	0	0	2	0	0	0	2	5
26	TIBETAN	0	0	2	0	0	0	2	4
114	TIBETAN	0	0	0	0	0	2	2	2
48	THAKTOKWA	0	0	2	0	0	0	2	6
84	SHORE	0	0	2	0	0	0	2	4
20	RONGSERWA	0	0	2	0	0	0	2	4
33	RONGSERWA	0	0	2	0	0	0	2	5
73	RONGSERWA	0	0	0	0	0	2	2	4
99	RONGSERWA	0	0	0	0	0	2	2	5
37	PHINASA	0	0	2	0	0	0	2	3
41	KHAMBABA	0	0	2	0	0	0	2	7
98	GURUNG	0	0	2	0	0	0	2	6
106	GURUNG	0	0	0	0	0	2	2	6
65	CHUSERWA	0	0	2	0	0	0	2	3
97	CHAWA	0	0	1	0	0	1	2	4
104	CHAWA	0	0	2	0	0	0	2	5
43	RONGSERWA	0	0	0	1	0	0	1	5
110	MANDEWA	0	0	0	1	0	0	1	5
42	TIBETAN	0	0	0	0	0	1	1	10
60.1	THAKTOKWA	0	0	0	0	0	1	1	6
93	?	0	0	0	0	0	1	1	4
63	TIBETAN	-	-	-	-	-	-	0	4
40	CHAWA	-	-	-	-	-	-	0	4
121	未調査	0	0	0	0	0	0	0	7
125	未調査	0	0	0	0	0	0	0	1
23	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	5
39	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	8
75	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	3
81	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	7
112	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	3
115	TIBETAN	0	0	0	0	0	0	0	2
96	TATSANGA	0	0	0	0	0	0	0	8
36	TAMANG	0	0	0	0	0	0	0	4
32	TAKSHINDOK	0	0	0	0	0	0	0	3
68	TAKSHINDOK	0	0	0	0	0	0	0	3
83	SYURE	0	0	0	0	0	0	0	4
34	RONGSERWA	0	0	0	0	0	0	0	1
44	RONGSERWA	0	0	0	0	0	0	0	1
16	MANDEWA	0	0	0	0	0	0	0	5
28	KHAMBABA	0	0	0	0	0	0	0	6
111	KHAMBABA	0	0	0	0	0	0	0	4
58	GURUNG	0	0	0	0	0	0	0	2
82	GURUNG	0	0	0	0	0	0	0	3
27	CHUSERWA	0	0	0	0	0	0	0	3
60	CHUSERWA	0	0	0	0	0	0	0	7
70	CHUSERWA	0	0	0	0	0	0	0	7
合計		23	15	187	12	2	58	297	465
世帯平均		0.25	0.16	2.05	0.15	0.02	0.64	3.19	5.00
家畜保有世帯数		6	1	53	8	2	28	68	
その保有平均頭数		3.83	15.00	3.47	1.50	1.00	2.14	4.31	
非保有世帯数		87	92	40	85	91	65	25	

頭以下であるから、それらの世帯でも年に一頭といった定期的なヤク肉の自給に十分な規模の頭数ではない。毛の利用についても、ヤクの毛で織った荒い布は贈り物として今でも重要ではあるが、クンプ全体でこうした仕事ができる人は少なくなっている。現在のクンプ地方の夏放牧では、移動式のテントではなく固定施設が拠点にされ、かりにテントが必要とされるときでもヤクの毛のテントでなく、登山用テントなどが流用されることも多い。またヤク布が着衣にされているのを見ることがほとんどない。

牦牛はとくにナムチェ（全家畜の63%、93世帯中53世帯、57%）に多く見られるものの、これを保有する世帯はクンデ（50世帯中29世帯、58%）、ディンボチェ（76世帯中26世帯、34%）にも少なくない。利用目的はやはり登山・トレッキング関係の輸送である。犁耕など農耕用の役畜としての利用もされているが、観光化以前から牦牛の主たる利用目的は輸送ならびに交易にあった。ナムチェの牦牛はギャジョの谷などで夏は放牧されているが、常時人はつかず、持ち主は2週間に1度くらい健康状態を確認し塩をやるために訪れるのみで、荷運びに必要なときにのみ連れおろされる。

牦牛を集落ごとでみれば、ナムチェでは牦牛と対照的にこれが少ない。頭数の上では牦牛の10分の1にも達せず（187頭に対して8頭）、保有世帯数（率）もそれをはるかに下回る（93世帯中8世帯、8.6%）。しかしクンデでは若干牦牛の方が多いうが、頭数においても保有世帯数においても（66頭に対して57頭、50世帯中26世帯、52%）牦牛の保有が牦牛に匹敵するものとなっている。ディンボチェではかえって若干牦牛の方が多くなり、61頭に対して67頭、76世帯中30頭、39.5%となっている。クンプの現状において牦牛の飼養目的は搾乳にあり、一般に牦牛の場合よりも集落に近いところでの放牧がなされている。しかし前号で記したように、ナワの役職に現れる畜群管理制度の存続するナムチェ以外の集落にあっては、夏の数カ月間は集落内で牦牛を飼う訳にもいかず、集落から離れて人が常時つか、集落近くの放牧地なら毎日放牧と搾乳に通うことが必要になっている。

牦牛はクンプ地方の牛類家畜の中ではもっとも少なく、保有する場合でも1頭のみもつ場合がほとんどすべてである。集落別に保有世帯数をみると、ナムチェ（93世帯中2世帯、2.1%）クンデ（50世帯中7世帯、14%）ディンボチェ（76世帯中26世帯、34.2%）と、意外なことに集落の高度を上げるほど多くなる。小林茂の記すようにもともとクンプには在来牛の純血種は少なく、ティンリー地方など外部から持ち込まれた。これの飼養目的は現在でもゾ（ディム・ゾ）の交配にある¹⁴⁾。そのため、保有する世帯の多くは、牦牛保有世帯となっている。牦牛の数に含まれているのは、純血種の牦牛と厳密には不完全にしか「戻し」を行えないゾの子孫である牦牛が入っており、すべてがゾの交配に耐える牦牛ではないが、既述のように特にクンデ以上の諸集落では標高の上でディム・ゾが適当であり、牦牛保有世帯がその交配をよく行うことが、標高順に並べてみた集落ごとの牦牛保有頭数の分布に関わっている。

最後に牦牛であるが、牦牛に対する保有頭数と保有世帯数（率）を集落ごとにみれば、ナムチェ（2頭に対して28頭、93世帯中28世帯、30.1%）とクンデ（7頭に対して43頭、50世帯中27世帯、54%）ではこれが牦牛よりはるかに多く保有されているのに対し、ディンボチェ（26頭に対し22頭、76世帯中26世帯、28.9%）ではむしろ牦牛よりも若干少ない。このことには牦牛の飼養目的である搾乳が絡んでいる。三集落の牦牛保有世帯のうち牦牛をも保有するのは3例のみで、牦牛を保有する世帯の多くは牦牛を持たない。牦牛の良質の乳を獲得していれば、牦牛保有は特に求められないのである。

乳といえば牦牛も問題になるが、各集落の牦牛保有世帯中の牦牛保有世帯をチェックしてみると、ナムチェでは28世帯中2世帯であって乳は牦牛か牦牛の一方（多くは牦牛）のみに依存している率が高い。それに対し、ディンボチェでは牦牛保有世帯22世帯中10世帯、クンデでは27世帯中17世帯であり、乳を牦牛にのみ依存する例と牦牛牦牛双方に依存する例が共存しており、牦牛を持っても牦牛の保有が求められる傾向がナムチェより

も強い。これは、集落の近くでヤクに似た乳を比較的多く獲得できるという牝ゾの便利さが好まれているのである。なお牝牛は、牝牛の場合と同じく、クンプ地方全体にわたって純血種は少なく、多くの牝牛は、戻し交配によってできたゾの子孫である。

以上のような家畜種ごとの検討からクンプ地方三集落ともに確認されることは、主たる用途は（牛を除いて）牝の場合は輸送、牝の場合はどれも搾乳にあることである。そして、牝牛と牝ヤクの場合は、ゾ交配の種牝としての用途があることも見落とせない。家畜種としては、ヤク・ゾ・牛の3種類ではあるが、集落による標高などの自然条件の違いに牝牝の用途・飼養様式の違いが絡まり、かなり複雑ではあるが一定の傾向をもった集落ごとの特徴があることがわかる。

③世帯差と三集落の評価

さらに各集落での世帯差を確認しつつ、三集落の牧畜を評価したい。まずディンボチェである。前稿（月原）で記したようにクンプ地方の伝統的生業様式はヤク牧畜に関連した半農半牧であるトランス・ヒューマンズと想定しうる。ディンボチェは背後に高山放牧地をもつため、ディンボチェでの耕地・家屋所有とヤク牧畜は強く関係しうる。これからすれば、ディンボチェに集まる世帯に比較的ヤクが多いというのは当然かも知れない。全家畜頭数の68%はヤクである。ヤク牧畜にも深く関連するナワの制度は、ドード・コシ水系ではとりわけこの集落においてきびしく、夏の数カ月の間は人も家畜も耕地・家屋のあるディンボチェに降りてはならない。ここに、確かに移動牧畜と農耕を併せた生業の伝統を見ることができる。しかし、既述のように牝ヤクを保有するのは4割弱の世帯にすぎず、しかもヤクの頭数も20頭以下がほとんどである。牝ヤクを持つ世帯でも、牝牛を始め、それからの交配で得たゾを家畜種構成のなかに含むのが一般であるし、また家畜を持たない世帯は76世帯中12世帯、15.8%にも達している。

もともとほとんどの家畜はヤクであったはずのクンプ地方でありながら、すでにヤクの移動牧畜

によって特色づけられる集落というには適さなくなっている。ましてや、乳・肉・毛の利用においては、少なからぬ世帯がそれを達成しているとは考えられないのである。

個々の世帯の牧畜従事の詳細を聞き取れたわけではないが、第1章で設定した農牧民類型からすれば、すでに表2のf以下の、集落から離れて家畜の群れにつききりの働き手を世帯から出すのではない、より「農民」的な世帯の方が半分以上を占めていると思われる。すなわち集落全体の構成は、その中の世帯差はcあるいはdからjまでと幅広いながら、全体としては一般的呼称にいう半農半牧民（B）よりも農民（C）の集落と表現したほうが適切なほどの集落なのである。ナワの制度によって住民も夏にはディンボチェに留まっていたとはいえないとはいえ、家畜の少ない世帯は主住居のあるパンボチェなどに滞在したり、あるいは少数の家畜を持ってディンボチェ近くのナガゾンの小集落に滞在するなどするのである。

表4のごとく、牝ヤクを多く保有するものを一方の局におき、もう一方の局に、まったく家畜を持たないものをおけば、さまざまな中間型としての家畜種構成が存在する。しかし個々の例をみれば、世帯ごとの牧畜戦略はさほど複雑ではない。要するに牝ヤクの乳を獲得できないことを克服するために牝ゾか牝牛を飼うことか、登山シーズンにアルバイトでもうけるために牝ヤクまたは牝ゾを飼うこと、あるいはその双方をねらうことこそが、中間型の世帯の牧畜戦略にほかならない。家畜を持たぬものは、すでにクンプ地方で「伝統」に近いものとなりつつある出稼ぎや使用人としての奉公、あるいはその現代版である観光ガイドやコックなどの仕事からの現金収入に頼っているのである。ただ、多くの中間型のなかでも牝牛や牝ゾしかもたない世帯の例には、その家畜種構成が乳の獲得のみを主目的としているがゆえに、牝畜が象徴する輸送とゾ交配に関わる輸送・交易などを選ぶのではない、いわば「農民」らしい自給性を感じられる。

クンデにおいてもディンボチェと同様のことが指摘できるが、ここではさらにヤク牧畜が後退し

ている。全家畜頭数の上からすればヤクの頭数をゾがわずかに上回っている。牝ヤクに代表されるヤクの移動牧畜を行う世帯は、ディンボチェでの比率よりも小さく、1割程度である。ナワの制度はきびしいとはいえ、夏の時期に家畜のみならず住民までが集落に留まてはいけないというわけではない。最も支配的なのは、f ないし g 以下の、集落の近くで日帰りも可能な範囲での牝ゾ・牝牛の搾乳目的の放牧と、牝ヤクまたは牝ゾによる輸送アルバイトの両方をもくろむタイプである。集落全体として判断すれば、もはやヤク牧畜よりもゾ飼養に中心が移行している農民（C）の集落である。クンデでは、現在家畜の所有が経済的にどの程度重要であるかを調べるため、各世帯がおおよそ経済的に上中下3つのうちどれに属するかについて、ある村人の印象を聞いてみた。それは表5の右欄にR（裕福）M（ふつう）P（貧しい）のように記録したとおりだが、とくに強い相関はみられない。すでにクンデでも登山・旅行関係でどれほど現金収入があるかが富の尺度にされており、ほとんどのおとこ手がこの関係の仕事を不定期にでも行っている。

ナムチェの場合は、全家畜の63%が牝ゾである。ここではナワの制度は廃止された。クンデやディンボチェに比べ、牝ヤク保有世帯から家畜を持たない世帯までの間にさまざまな頭数規模を持った中間型がみられるわけではなく、かなり画一的なタイプ、すなわち2頭から5頭程度の牝ゾがあり、それに牝牛が1～2頭あったりなかったりという、輸送・交易重視の家畜種構成が支配的である。農牧民類型の表からすれば、g 以下の世帯例がほとんどすべてを占めることになり、半農半牧のヤク移動牧畜という意味合いからはクンデよりも、また一層定着的な牧畜を行っている集落である。定着畜産を代表する牝牛のみを少数持つような例もみられる。しかし、家畜を持たない世帯の比率はクンデやディンボチェより高く（30%）、この牧畜は農民的というよりも、むしろ輸送民ないし交易民的である。もはやヤク牧畜の影はたいへん薄く、牝ゾと牝牛に特化した、かなり特殊な牧畜である。ディンボチェとクンデの家畜種構成はほ

ぼ同質のものであったのに対し、ナムチェはそれらとは少し質が違う。それは、集落・世帯内での家畜の再生産というものを考えてみたときに明かになる。

三集落ともに、いわば例外的な家畜種構成のことが見いだせる。簡単な例では、牝ヤク、牝ゾ、牝牛のうち、いずれかのみを保有している例である。これらは、自家の家畜の中で家畜を再生産できない。自家再生産ができないという意味では、このような家畜種構成は世帯としての牧畜の自立性には乏しい。ではいったい世帯内で再生産が確保されているような例はどのくらいあるのだろうか？

ゾはひとまずおいて、純血種のヤクまたは牛を再生産できる世帯がどれくらいあるかを見てみれば、集落を問わず、ほとんどすべての牝ヤク保有世帯は再生産が一応可能な家畜種構成になっているが、ディンボチェ→クンデ→ナムチェの順に、 $24 \rightarrow 6 \rightarrow 1$ である。牛については、とりあえず牝牝の揃っている世帯をもってそれが可能とみなせば、 $4 - 3 - 2$ である。重複をのぞいた合計世帯数は $25 \rightarrow 8 \rightarrow 3$ である。もともと在来牛の純血種がなかったという事情もあるが、ヤク群を保有する例がもっとも世帯としての再生産性が高い家畜種構成を持っていることになり、それは高地の集落ほど高いのである。

次にゾをつくる場合であるが、世帯の中でゾの継続生産を行いながら、かつ遺伝管理が行い易いのは、ヤク（または牛）を牝牝とも豊富に持ってその純血種の再生産をしっかりと確保した上で、牛（またはヤク）の種牝1頭または数頭を獲得し、それを牝に慣れさせ、繰返しゾの交配に用い、生まれた牝ゾの戻し交配を、ヤク（または牛）の種牝でしっかりと継続することである。

理論上は、ヤク・牛のどちらかを主畜とするのではなくその双方ともに純血種を再生産しうる規模で保有し続けることや、一方を主畜として他方の種牝を獲得するのではなく、母牛を獲得することがありうる。しかしそれらが不適当な理由の一つは、ゾ交配につかう種牝（たとえばヤク）は、一般に幼畜の時から同種（ヤク）の牝とは一緒に

しないで、その相手（牝牛）と常に一緒に放牧するなどして慣らせる必要があることである。

ではこうした家畜種構成を実現している例を見てみれば、ディンボチェ・クンデで牝ヤクを主にした家畜種構成を持ちながら、牛の種牡を1、2頭もってゾ交配を実行している例のみなのである。またそれを今後実現し易い家畜種構成も、牝ヤクをもつ例のみなのである。

このように、牝のヤク群を保有する世帯こそが、純血種でもゾでも再生産性が高い。言い替えれば、牝ヤクを持たない「中間型」のほとんどは、自己生産できない家畜種構成を持っているのである。家畜をめぐって盛んに行われている交易・種牡の貸し借り・飼養委託などなしに、こうした家畜種構成は有り得ない。実はこれについては調査はまだまだ不十分であり、今後特にソル地方をも含めて整理することを課題としたいが、ここでは次の点を確認しておきたい。ディンボチェ・クンデのゾはディム・ゾであり、母牛はヤクであるがために、そのほとんどはこれらの集落の中で生産されているのに対し、ナムチェの場合はパム・ゾが多く、すなわちヤクの種牡と牝牛が必要なのだが、もとよりゾからの不十分な戻し交配でしかない牝牛が多く、ナムチェの牛を交配に用いても、優れたゾができないことも少ないこともあって、ゾの再生産はそれほど盛んではない。この理由は、ナムチェ全体の家畜種構成が純血種の牛をもともと主畜としておらず、またほとんどの世帯では、その純血種の牝を群れの規模で保有するほどに、純血種の安定した再生産を確保しえていないことによる。事実、現在のナムチェ住民にゾの交配の仕方など聞いたとしても、一部の専門家以外はクンデやクムジュン一般の人ほどによく知っているわけではない。ナムチェにパム・ゾが多いのは、ルクラなど南方の低地との輸送に頻繁に用いるためであるが、その多くは南方の人から購入されている。

クンデとディンボチェの場合、ヤク牧畜は衰退しつつあり、ゾは増大しつつあるかも知れない。しかしそのゾはディム・ゾがほとんどであるために、牝ヤクをもっている世帯が安定してその純血

種を提供し続けられる限り、比較的わずかの種牡の牛さえ途絶えなければ、集落内での再生産性は比較的高いのである。だがナムチェの場合は、主畜はどうてい牝ヤクでも牝牛でもなく、再生産性ははるかに低い。古くから極端にゾに特化した家畜種構成を持っていたナムチェの牧畜が、ディンボチェ・クンデとは少し違って、より交易民的だというのは、こういう事情にもよっているのである。ナムチェではゾの幼畜を育てるのに十分な草がないために、低地の集落に飼養を依頼することも多く、ナムチェのゾ飼養には低地との関係が問題となるであろう。

さて以上のように特徴をまとめてきたドード・コシ水系三集落の牧畜を全体的に評価するならば、一言でいえばヤク牧畜はかなり衰退している。各集落内には牝ヤクを保有するものを頂点とした世帯差があり、いわばそれを横だおしにするような形でおおよそ標高に従った集落差が存在している。さまざまな「衰退の中間型」とでもいえる家畜種構成は、おもに牝牝の違いによって農民的と交易・輸送民的というふたつの方向への牧畜戦略からとらえられる。

現在クンブ地方で多くヤクを保有する例はボーテ・コシ水系ターメのある住民が50頭程度持つ例があるのみである。また、ヤクの肉・乳利用が盛んではないことや、ゾの交配の取り込みなどからしても、伝統的ヤク牧畜の衰退はあきらかである。ヤク牧畜を行う半農半牧の地方ということでクンブ全体を農牧民類型から判断すると、すでにディンボチェにして移動を要する牝ヤク保有者（d以上）が多数派ではなく、クンデではさらに少数派である。牝ヤク保有世帯のみをヤク牧畜における頭数基準から判断したとしても、最大でも30頭に満たず、多くは20頭にも達せず、ヤクをもつ半農半牧民としても決して豊かではない。地方全体で見れば、常時家畜につきっきり移動牧畜を行わず、牝ゾや牝牛でも日帰り放牧の範囲で集落近くの放牧地に止めおく夏放牧を行い、冬（特に夜）は家畜を家の中にいれて保護しながら飼料を与える飼養様式が支配的で、全体としてはf以下の世帯が大半を占める、かなり「農民」的な地方であ

るといえるだろう。そしてナムチェはさらに交易民的であって、その主畜たる牦牛の交配に必要な親畜のどちらをも満足には再生産してないために、いわば周りの「後背地」たる諸集落なしには主畜をも獲得できないのである。

ブータンのラヤの場合は、中心家畜はヤクでありゾは含まれず、ほとんどの世帯はおよそ20頭以上のヤクを持ち、50頭ほど持つ世帯も珍しくなかった。肉・乳・毛すべてがよく利用され、生活必需品であった。もともと牛はなくヤクが主たる家畜であったはずのクンプのヤク牧畜の崩壊は、どのように進行してきたのだろうか。

2) 牧畜の変化とナムチェ

①現在までの牧畜の変化

クンプ地方でのヤク牧畜の衰退経過を示すデータとしては、ハイメンドルフの記録がある。彼による1957年と1971年のデータを表7に示す¹⁵⁾。これによって確認でき、またハイメンドルフ自身が記していることによると、次のようなことがいえる。1957年当時、すでにナムチェの家畜種構成は、極端に、といって良いほど牦牛を中心にしていた。当時、ナムチェを経由して年間数百頭にも及ぶ牦牛がチベットへと輸出されていた。そのときまだ他の集落は、幾らかディム・ゾをつくっていると

をもっており、たとえばボルツェにはまったく牦牛はなかった。これが1971年になると、クムジュン、ボルツェなど、ナムチェ以外の集落でも、1957年の時点以降かなり急激に牦牛の数が減少し、それに引き替え、ゾが牦牛とともに増えるという変化が起こってきた。つまりクンプ全体で、ヤクからゾへという家畜種の転換が進んだのである。

ヤク牧畜の衰退に特に関わる家畜として、仮に牦牛・牦牛・牦牛の頭数比を表7の1957年のデータと1990年の調査データと比べると、クンデについては、(316:35:2) → (64:66:57)である。またディンボチェの代わりにパンボチェを取り上げてみれば、それは(228:7:2) → (324:61:67)である。明かにハイメンドルフの指摘した家畜種変化の傾向はクンプ全体で進んできたのだ。

しかし、数字から判断する限り、この変化はどうやらパンボチェ、ディンボチェにおけるよりもクンデにおける方が急速であったらしい。現状のヤク牧畜衰退（農民化）の程度が、ディンボチェよりもクンデの方が著しいのは、このためであろう。近年の観光化は、特にそれを促しているのではないかと思われる。既に確認したように、現状のクンデやディンボチェでの牧畜は、ナムチェと異なる家畜種構成を持っている。それはたとえば、牦牛だけではなく牦牛も同じくらいの頭数がある

表7 クンプ地方の家畜種構成の変化（ハイメンドルフによる）

Village	[Houses]or H-holders	Cattle- Owners	male yak	female yak	male zoe	female zoe	common ox	common cow	Total
Khumjung (in 1971)	108[93]	33	14 (32)	333 (194)	24 (39)	15 (98)	13 (13)	56 (40)	488 (432)
Khunde	[45]	28	2	316	35	2	17	16	416
Tengboche	-	1*	-	23	4	2	1	0	31
Milingbo	[18]	5	2	20	-	3	-	8	38
Pangboche	[58]	33	2	228	7	2	3	12	287
Phortse (in 1971)	59[63]	36	16or39 (109)	454 (240)	- (5)	- (7)	8 (?)	17 (?)	531 (?)
Namche	73[73]	28	-	40	238	50	1	48	405
Jaro	?	3	1	25	-	-	-	4	33
Thamichok (in 1971)	[192]	91 (117)	2 (46)	647 (618)	79 (140)	27 (32)	27 (30)	72 (123)	945 (1106)
Total	596	258	39	2086	387	101	70	233	3174

*All the cattle of Tengboche belong nominally to the abbot of the monastery.



写真4 集落景観：ナムチェ
(クンプ地方、3500m.) 1989年8月

こと、ディム・ゾ生産のために種牡としての牝牛を持っていること、標高の高いところでの「牝ゾ」(輸送畜)の役割を果たす牝ヤクの上に片寄った特殊な保有例が見られることなどである。これらは、交易的性格の突出したナムチェより、まだまだ「農民」的な、自給・再生産性の高い牧畜であることから説明しうる。これらはもちろん、それらの集落のもつ条件に見合って現れた、ヤク牧畜崩壊過程の中間型であろう。しかし、1957年の数値からすれば、地方全体としては、明かに牝ゾ飼養が中心になっているから、農牧民類型の上ではd以上の世帯は今よりはるかに多かったと考えられる。

単純に理解すれば、ゾという雑種の牝牛が、徐々に牝ヤクに代わってクンプ地方諸集落へ伝わっていく「クンプのゾ化」現象が、ここ数十年の間に、特に急激に起こったのだ。この、ゾという家畜でつながる流れの中に、現代のクンプにおけるヤク牧畜衰退の過程を見るべきであろうし、農耕・交易をも含めた地方経済全体の変化も考える

必要がある。

しかし、急速にヤク牧畜を衰退させた集落に対し、ナムチェの保有家畜構成の変化は、(40:238:50) → (15:187:12) とその比自体はさほど変化していない。チベット交易盛んになりし頃から、ナムチェは交易の村として、極端に牝ゾを中心とした異質の畜種構成を持っていたのである。1957年よりもはるかに以前から今日まで、ナムチェは一貫してクンプ地方の交易中心であり、クンプ地方と外部との経済・社会関係の上で常にこの地方の玄関であり続けてきた。それゆえ、現代への変遷をより根源的に問題にしようとするれば、ナムチェとゾの関係をはっきりさせねばならない

②現状にみるクラン構成の集落差

1957年、1971年、1990年という3つの時点のクンプ経済を振り返ってみれば、1957年はまだナムチェを中心としたチベット交易が盛んな頃であり、クンプ地方の伝統的経済が残っていた時代かと思われる。これから1971年までにはヒマラヤごえの

交易ルートであったナンパ・ラ（峠）が政治的な理由によって閉鎖され、またナムチェに定期市が開設された。さらに1971年から1990年の間にはクンプ地方に登山・トレッキング関連の観光化の波が押し寄せ、交易中心の生業をいとなむ住民の多かったナムチェには新しいロッジが林立し、ナムチェの観光基地化が進んできた。現状では登山・トレッキング関係の観光を抜きにクンプ地方、特にドード・コシ水系諸集落の経済を語ることはできない。このように、チベット・ネパール間交易、その衰退、バザール、登山観光といった流れの中に、クンプ経済の現代の変遷の概略はとらえられる。

しかしそれ以前を含め、外部と常につながってきたナムチェとその経済を考える上では、カムバ

を無視し得ないことは、すでに前稿（月原）に述べた。ナムチェには、集落が発生したと思われる170年前頃からすでにカムバが住み着いており、またその後も到来するカムバが集中的に集まる集落としてあった。このカムバのシェルパ社会への参入という問題を理解するために、1990年の調査ではナムチェに加え、クンデ、ディンボチェでも各世帯の父方のクラン（ルー）を調査した。ここで、その結果見られた集落差について報告する。

クンプ地方に入ってきた人口は、この地方最初の入植の時から、一貫して、ほとんどすべてチベット側から入ってきている。本来のシェルパとして認められているのは、20余りのクランに属する人々であると一般に言われ、また、シェルパのクランは外婚単位となっているとされる。これらの

表8 シェルパ諸クランに関する諸説の整理

(1) オピッツ(Opitz)によるシェルパ諸クランの整理						ab.1950-
1530 - 1600		1750-1850	1800-1850	ab.1850		?
Old - Clans		New-Clans	Pseudo-Clans	Khamba		Yemba
Proto-Clans	Sub-Clans	Nawa	Tamang-Sherpa	Tibetan Clans	Penakpa	(Yawa)
Thimmi	Paldorje	Lhukpa			Shardosum	(屠殺人)
	Salaka	Sherwa	Newar-Sherpa		Peipa-shartajung	
	Khambadze	Jungdomba		Rolwaling Clans	Sakyepa	
	Gobarma	Mende	Chetri-Sherpa		Kyironga	
	Lakshindo	Chuserwa			Nejunga	
Minyagpa	Gardza	Shangup	Gurung-Sherpa		Pingam	
	Shire				Omjunga	
	Trakto		Dhukpa		Tsemjing-thang	
	Binasa				Pherup	
	Gole					
	Pankarma					
	Yulgongma					
	(Kapa)					
	Chakpa	Chiawa				
		(Chawa)				
Serwa	Lama					
	(Lamaserwa)					

(2) タンボチェ寺のリンボチェ（転生仏）による整理

元の4クラン	派生クラン	新クラン
Timi	Padzin	Chusharpa
	(Paldorje)	Murmin
	Salakha	Lhukpa
	Dhagshingto	Shangkhu
	Khambache	Zongnagpa
	Goparma	Mendawa
Thakdopa	Gole	Nawa
(Michen-topa)	Gartsa	
	Pinasa	
	Pankarma	
	Sharpa	
	Penagpa	
	Shari-topa	
Chawa	Chawa	
Lama	Serwa	
	Gombawa	

(3) ハイメンドルフの整理(横並びのものは兄弟クラン)

本来のシェルパと認められている21クラン		
Chiawa		
Chusherwa		
Garza		
Gole	Pinasa	Thaktu
Goparma		
Khambadze		
Lakshindu		
Lama		
Mende		
Muming		
Nawa	Lhukpa	
Paldorje	Salaka	
Pankarma		
Shangup		
Sherwa		
Shire		

中でも、最初にクンプに入ったとされるのは、4つのプロト・クランであり、それから分化したオールド・クランが生まれたうえ、その後新たにニュー・クランが加わってこの20余りの「本来のシェルパ」が形成されている。さらに、その後チベットからきたいわゆるカムバがシェルパ社会に参入し続けた。もっとも最近にチベットから入ったのは、チベット難民である。

シェルパ社会の構造は、「本来のシェルパ」を中心にした同心円状の模式図によってこれまで説明されてきた。ハイメンドルフとオピッツの提起したそれは、図6のとおりである¹⁶⁾。シェルパ社会はオープンな社会だとよく言われる。どういうことかということ、新来者のカムバなども、森林管理や家畜管理の役職につけたように、さして、経済・社会のうえで差別されることがない。婚姻を見れば、かえって、図6の同心円構造の内部で通婚関係が閉じようとするのではなく、むしろ、中心部と周辺部の間でしばしば婚姻が生じる、とい

うのである。それは前稿（古川）のクラン（ルー）のクロス集計表からもある程度言えることでもある。いわゆる本来のシェルパとして認識されている人々よりのちにクンプへ移入した人は、何世代もの間にわたって、カムバと総称されるのである。シェルパ社会に参入した時代別に諸クランを整理したオピッツのほか、シェルパクランに関する情報として得たのは、タンボチェ寺の転生の整理によるもの、そしてハイメンドルフのもの三つであった。この三者の著作から、表8を整理した。表記上スペルの違いは少なくないが三者の内訳はよく対応しあっている。

そこで、世帯の属するクランの把握できている範囲で、集落をなす諸クランの構成に関して、比較を試みた。オピッツやハイメンドルフにならって、1：オールド・クラン、2：ニュー・クラン、3：カムバ（ないしはチベット難民のうちでもシェルパ社会に参入しつつあるもの）という形で、参入時代別に3群に整理したのが表9である。も

表9 各集落のシェルパクラン整理

(1) 把握した各クランの戸数					(2) 整理1（戸数）				
		ク ラ ン の 名 前	ナ ム チ エ	ク イン ボ デ チ エ		ナ ム チ エ	ク イン ボ デ チ エ	3 集 落 の 全 体	
1	オ ル ド ・ ク ラ ン	THAKTOKPA	5	3	7	1	21	14	73
		PALDORJE	2	3	9	2	17	26	67
		NAWA			13	3	32	8	48
		SHIRE	3	3	5	4	1	0	1
		CHAWA	6		1	5	6	0	6
		PHINASA	2		1	合計	77	48	195
		TAKSHINDOK	3						
		LANGKARU		3					
		GARZA		1	1				
		LAMA			1				
2	新 ク ラ ン	SALAKA		1					
		CHUSERWA	14	10	8				
		SHANGGU		5	5				
		LHUKPA		7	3				
		SHERWA		4	5				
3	カ ミ ・ チ ム ・ タ マ ン ガ ・ ネ ワ ・ チ ベ ッ ト 難 民	MENDEWA	3		3				
		RONGSERWA	11		2				
		GURUNG	8			1	27.3	29.2	54.3
		TAMANG	1		1	2	22.1	54.2	34.3
		NEWAR			1	3	41.6	16.7	11.4
		DHOKPA		1		4	1.3	0	0.5
		チベット難民或はカムバ	11	7	4	5	7.8	0	3.1
4	不明	TASANGA	1			合計	100	100	100
5	カミ	BISWAKARMA	6						
合計			77	46	70				

(3) 整理2（百分率）

	ナ ム チ エ	ク イン ボ デ チ エ	3 集 落 の 全 体
1	27.3	29.2	54.3
2	22.1	54.2	34.3
3	41.6	16.7	11.4
4	1.3	0	0.5
5	7.8	0	3.1
合計	100	100	100

しナムチェの項に現在住んでいるチベット難民をすべて含もうとすれば、さらに10数戸増えることになるのだが、これらはシェルパ社会に帰属意識を持たず、独自の祭をもち、また家畜などの財産を持っていない点で除外している。逆にそうした意味で、ほぼ社会的に「シェルパ」とみなして良いと思われるチベット難民は含んでいる。ナムチェで雇った若者達らがノートに記入してくれた各世帯のクランは、前稿の表の修正も加えて表4から表6の家畜種構成の表にある通りである。チベット系言語のアルファベット転写ではさまざまなスペルが発生し得るので、どのクランに対応するのかが帰国後ではわかりにくいものもあった。これを表9に整理するに当たっては、次のようにみなす操作を行った。Pinasa=Binasa, Takshindok→Dhagshingto=Lakshindo=Lakshindu, Garja→Garza, Thaktokwa→Trakto=Thakto, Shyangung & Sangung→Shangup=Shanggu, Langkaru→Pangkama, Syure & Shore→Shire

ここで一括したカムバは、移入した時代の幅がたいへん大きい。つまりすでにナムチェが集落として発生した頃からクンプに住んでいたカムバから現在まだ一代目のチベット難民の一部までを含んでいる。だから、聞き取りによってまだまだ細かく精度を高めうる可能性は高い。しかし、結果の要約である表9の(2)と(3)にあるとおり、ディンボチェからクンデ、ナムチェに下るに従って明かにカムバが多くなる。逆にいえばナムチェから上の集落に行くほどに、集落の中でカムバの世帯が占める割合は下がるのである。

強引に、集落内で支配的な群だけでいえば、ナムチェ・クンデ・ディンボチェの主たる住民は、それぞれカムバ・ニュークラン・オールドクランであるとさえいえる。

かつてはクンプにおいても、かなりの範囲にわたる水系を特定のクランが占有的に使うというクラン所有地があったといわれているが、現在は、そういうものはなく、家畜管理の規則にふれない限り、すべての放牧地はクンプ全体の共有物となっている。表4から表6の家畜種構成によってもうかがわれるように、家畜の所有頭数に見る限り、

特に古いクランのものには家畜が多く、カムバの世帯に家畜が少ないようになってはいない。しかし、カムバの参入率と、ヤクからゾという家畜種構成の集落ごとのあり方が相関することは、前稿(月原)の目測をさらに補強する。すなわち、カムバ(チベット人)の移入とヤク牧畜の衰退に現れる近現代のクンプ経済の変遷が、あるいはゾという家畜種そのもののさえもが、強く関係しあっているのである。

6. ティンリー地方の牧畜と社会・経済

カムバたちはナンパ・ラの北のティンリー地方、ロンシャル地方、ロールワリン地方、西ネパールなど、さまざまなところから、借金を抱えるなど、チベット各地での生活に困ってクンプに流入してきた。彼らはナムチェを起点に生活し、工芸や織物、交易を得意とし、それによって身をたててきた。その重要な「故郷」ともいべきヒマラヤ北面ティンリー地方の調査は、クンプほど濃密に行えた訳ではなく、短期的に調査し得たラチュー村でも、その牧畜の概要把握に精いっぱいであった。生業一般の把握はあくまで概要にとどまり、その時代変化を取り扱うことなどは、もとより不可能である。しかし、自然環境の上で対照的ながらクンプとのつながりも強く、またある対称性も見いだすことのできる地方であることが、アジズの文献などからも確認できた。それゆえここに取り上げて、補足説明をしておきたい。

1) ティンリー地方の牧畜経済

①農耕地帯

1990年3月に訪れたティンリー地方は、ナンパ・ラ(峠)の分水嶺を経てクンプ地方と隣接しているとはいえ、やはり自然条件はまったく異なっていた。乾燥した気候とはるかに広大な地形がそこにはあって、いわゆるティンリーの町(ガンカル)を横切る広い河床が、5月には緑に変わるなどとはとうてい予想できなかった。周囲の山は砂れきの多い茶色の丘陵で、風が強かった。ガンカル(4300m.)には数本だけ貧弱な柳を認めたのみで林はなかった。この農耕地帯からして、もはや燃料は家畜の糞に頼らねばならないのだった。

クンプに対し、ティンリー地方ははるかに広い。ティンリー平原は広い沖積地であるが、ヒマラヤ南面でいえば、カトマンズ盆地ほどの広さがある。耕作に必要な水は川沿いの沖積地でのみ得られるために、耕作地と集落はその川の縁辺に集中する。ただし、広くて緩い沖積盆地といっても水流のあるところは限られ、耕地と集落は平原の各所に点在している。各集落は、クンプでの集落の規模と比べて特別大きいわけではない。しかし耕地面積ははるかに大きい。クンプの平均的な耕地の生産性は、ジャガイモにしてもディンボチェの大麦にしても播種量の平均5倍程度であったが、ティンリーの農耕地帯では3倍程度である。作物は大麦が中心で、わずかにソバもジャガイモもある。しかしすべては灌漑を不可欠とする。クンプ地方のディンボチェにも大麦の灌漑畑があるが、実際に観察したところ灌漑方法（耕地内の導水方法）は異なっている。灌漑回数もそれぞれ3～5回、6～7回とティンリーの方が多い。ティンリー地方の家屋は平屋根で風に強い家屋であって、クンプ

のような、割板や石板を葺いた傾斜屋根ではない。また、クンプのとは違ってまったく集村となり、家屋とその周りの塀が接して家々は一塊をなしている。

ラチュー村（4300m.53戸,315人）は、ティンリー地方の中心の町、ガンカル近くの農村である。半数以上の世帯は一妻多夫婚を行っている聞いた。この村全体の家畜種と頭数は、牦牛85頭、牦牛なし、牦牛16頭、牦牛なし、牦牛15頭、牦牛80頭、羊と山羊4200、馬40頭であった。チベットの農耕地帯の中でも標高が高いため、この地方には驢馬はない。牦牛と牦牛は犁耕と脱穀などの荷役用、馬は乗用のために保有されている。牦牛も牦牛もなく、乳は牦牛からとられている。乳の質は牛の方が良いといいながらも、村人たちは羊と山羊からの搾乳も行っている。頭数が多いから、これから集めた乳の量はかなりになる。牦牛はロンシャル谷などネパール国境方面から、牦牛は遊牧民から入手している。

ラチュー村の住民のうち、ほとんどすべての世

写真5 集落景観：ラチュー
（ティンリー地方、4300m.）1990年5月



帯は、数十頭程度の羊・山羊と数頭の牛、特に牝牛を飼っている。牛は、多く持つ場合でも最大で8頭である。村全体の牝ヤクを集めたその一群は、一年中村の背後の山上の放牧地に放されており、農繁期など必要ときに、一時的に連れおろされるだけで、冬でもほとんど山に放してある。ヤク放牧に携わるものは二人。特定の村人が専業としていて、他の人のヤクを含めて放している。テントは所有せず、年中牝ヤクについているのではない。

ヤク以外の家畜が放牧される場所は、ティンリーの沖積平原の中の草地が主である。村の前に広がるこの草地は、冬にはすべて凍り付いて灰色になっているが、夏の時期には氷河の雪解け水がここを潤し、緑一面の草原になって周りの丘の茶色い地面と強いコントラストをなす。平原の中に時折土壁で囲った家の跡のようなものがある。これが山羊・羊を夜に入れる囲いである。ヤクのほかに、村から離れて放牧される家畜には、羊・山羊の17群（牧人は17人、群れの規模は60～300頭）がある。しかしこれは夏季のみである。夏に村から離れていたものも、冬にはすべて村に戻って家の囲いの中に収容される。テントはない。ただ、夏の放牧地といえども村からは遠くなく、半日以内で十分歩いて達せられる程度である。

馬、牛、ゾ、そして羊・山羊の一部は、一年を通じて村の近くに日帰り放牧に出される。夜は各家の塀の中に入れられる。牛群に対して牧夫2人がついており、牛の所有者（ほぼ全世帯）はその頭数の割合に従った頻度で、その輪番放牧にあたる。冬季には、ヤク以外の大家畜には大麦の藁を与える。子羊に対しては秋に村の近くの草地で採っておいた干し草を与える。この飼料にかなり頼る期間は12月から4月である。大麦の藁は、収穫の時には鎌を用いず根から引き抜いて、その部分も飼料に当てている。

このように、ラチューの主畜は牛、そして山羊・羊である。これらは、ティンリー平原の河床に広がる草原を放牧地としている。3月には、平原のなかにわずかに散在するヤクを見たが、農村近くの草地でヤクを放牧できるのは、冬の一時期

のみである。ラチュー村では多くのヤクは冬も山上の放牧地に放している。しかし、ティンリーの近くの山々は低い茶色の丘であり、牝ヤクの群れを放すことのできる高山放牧地とはなっていない。牝ゾ・牝ヤクは、牝牛では果たせない農耕用の畜力ないし輸送力のために保有されている。家畜種の上での、クンプとのはっきりした違いは羊・山羊にあり、これは乾燥度の違いに対応する。これに呼応するかのように、羊・山羊両方ともに、搾乳されている。農牧民類型からすれば、ほぼすべての世帯が輪番の日帰り放牧には加わっているが、夏の時期に村に戻ることなく放牧に従事しているといっても日帰りの可能な程度の距離で特定の牧人を決めて共同して放牧しており、農牧民類型からいえば、gに属する世帯を主にしてeに属する世帯が加わった農村である。表3に見た農民（f以下）の家畜種構成の例からすれば、チベットの農耕地帯の中でも、羊・山羊の頭数は比較的多い地方とは思われるが、もちろん牝ヤクの群れはない。ヤクの移動牧畜が、かつてはここで行われていたかも知れない、などと想像することは難しい。ヤクの群れを養える草原は、もっと遠方にある。

②遊牧地帯

ティンリーの農耕地帯には遊牧民はいない。彼らが住むのは、さらにヒマラヤよりの、広い高原である。遊牧民の家畜種構成の例を知る機会は、シシャパンマ峰北麓のセルン（4900m.）を一度訪れた時しかなかった。シシャパンマ北麓の農耕限界は4450m.あたりである。この程度の高さまでは、「農村」があった。しかしそこから氷河の舌端高度である5300m.までが、ただただ広く、遠い。特に、4700m.から5100m.あたりである。ティンリー地方あたりのこうした高原は、ポーロン高原と呼ばれる。相変わらず、草の密度がもっとも高いのは、河床沿いである。しかしそれでも、クンプ地方の草の密度とはまったく違うが、丘の部分にもまばらに草がみえてくる。この点は、ラチューなど、ティンリーの農耕地帯の丘とは違う。この緑の草は、夏の数カ月の間しかないけれども、家畜

の群れと遊牧民はこれに頼って生きている。セルンの遊牧民は固定家屋をもち、その集塊が「村」になっている。近くには採草地がある。ある12人（一妻多夫）の世帯の家畜種構成は、牦ヤク43頭、牦ヤク59頭、山羊70頭、馬7頭であった。夏の時期でも世帯の主だったメンバーはセルンにある固定家屋に生活し、3人のみがテント生活を続けながら放牧にあたる。畜群は、夏はシシャバンマBC付近（5000m）、冬はペグ湖（4600m）付近へと移動する。この移動範囲は、クンプ地方を横断するほどの水平距離である。交通・放牧のためには、セルンの人は馬を多用する。

セルンについては、1982年にここを訪れた中川潔と齊藤清明の報告がある¹⁹⁾。齊藤の記す数字によると、当時セルンは42世帯、人口213人(男98人)があり、世帯あたりの平均員数は5人であった。主食の大麦と交換に、前年度は村全体でヤク100頭、羊600頭を出す。当時の村長ダワ氏宅の家畜は、ヤク48頭、羊250頭で、前年度大麦との交換に出した家畜は、ヤク1頭、羊12頭であった。セルンの付近に同じような遊牧民集落は数多いが、シャブカ、ペルツェ、セルンを併せたセルン人民公社の人口は470人、家畜は合計ヤク2500頭、羊約13500頭であった。

聞き取りが少ないために細かいことは検討できないが、これらの家畜種構成例は表1から表3にみた遊牧民のそれにふさわしい。この住民はみな農耕は行わないから、農牧民類型からすれば、bの範疇にはいる世帯のみである。そして、主畜を純血種のヤク、羊・山羊とした、移動牧畜を行っている。この点で、農耕を主とし、牛と羊・山羊を主畜とした牧畜を行う農村とは、対照的な生業、牧畜様式を営んでいるといえる。

2) ヒマラヤ南北の対照性

以上のようにティンリー地方の牧畜や社会を概観してみれば、農耕の行われるティンリーの沖積平原の農村と、遊牧が行われるポーロン高原とで

は、住民類型も牧畜形態もまったく異なっているが、初めに確認したチベット文化地域全般にみられる標高—家畜種—住民類型の対応した秩序は、この地方でも確かに成立している。しかし、地方としてクンプとティンリーの特質を比較してみれば、その両者のそれは余りにも違う。

景観のうえでは、ヒマラヤ南面では天水耕作が卓越し、周囲を緑豊かな常緑針葉樹林に囲まれた農耕村落景観が見られ、高山放牧地が近接して農耕とヤク放牧を狭い範囲内であわせ易い。それに対し、北側の農耕村落景観は、灌漑畑がほぼすべてを占め、水流沿いにのみ落葉樹があつて、周りは乾燥した草もまばらな斜面に囲まれる。ヤク放牧は農耕地のある谷間の中では行えず、ヒマラヤ南面の場合よりはるかに傾斜の緩い斜面を遠くまで上ったところに、大規模なヤク放牧の可能な草地が現れるのである。

農耕・牧畜によった土地利用空間や社会という観点からすると、これは「乾燥チベット」における上下二層の農牧生産区の分化、「湿潤チベット」における、両者の融合という図式に整理しうる。

北面においては、現在でも高地には農耕に携わらない遊牧民のみしか住み得ず、また低地の農耕地帯ではヤクの移動牧畜は困難であるように、農耕生産区と牧畜生産区が上下二層にはば分かれている。社会的にも、異民族が住み分けるほどではないにせよ遊牧民社会と農耕民社会との分化がみられる。

それに対し、ヒマラヤ南面ではこの二つの生産区はいわば融合するがごとく小さな空間の中に押し込められ、社会的にも分かれてないのである。

ヒマラヤ南面高地のトランス・ヒューマンスという半農半牧生産様式には、垂直移動という面がはるかに強かったのに対し、北面の牧畜では、畜群の移動形態はたいへん水平的である。確かに幾らか垂直移動も含むとはいえそう表現するのは適当ではない。特に農耕地帯の場合は、主畜たる牛・羊・山羊は、季節を問わず、沖積地内の草地

の利用（あるいは舎飼い）をしている意味で、垂直移動ははまったくないとさえいってよい。移動牧畜の範囲もまた、両地帯の内部でほぼ閉じているのである。こうした違いが生じる理由は、やはりまず第一に地形の平坦さであろう。これによって農耕地帯、遊牧地帯ともに規模ははるかにクンプよりも大きいながらも、相互の隔たりも大きくなっている。

ラサヤシガツェのあるウ・ツァン地方でも、あるいはリトル・チベットと呼ばれるラダックでも、ここで指摘した上下二層の分化はみられ、農耕地帯の背後に遊牧地帯をひかえている。農耕の谷間では冬でもほとんどヤクの群れを見ることはなく、主畜は牛や山羊・羊になっている。遊牧民が持っているヤクの群れは、水平的な移動経路をたどりながら、上の方で年中回っている。一般の農村は家畜の群れをも持っていないが群れに従う個人が限られ、農耕を主とし定着的牧畜を従とした生業を持っている。これらの地域は、みな「乾燥チベット」と呼んでもいいであろう。「乾燥チベット」の中心をなした農耕地帯が、チベット文化地域全体の政治・宗教・経済の中心であったことは疑いない。しかし、その文化複合に大麦栽培とヤク牧畜が取り上げられるにも関わらず、この農耕地帯では両者を併せた半農半牧経営が世帯程度の集団では容易ではない。少なくとも現在においてはそうである。それに反して「湿润チベット」では今でも難しくはない。

ヒマラヤを境にした乾燥・湿润チベットの区分は今後の研究を進める上で有効と思われるが、ここで明記しておきたいことは、チベット文化地域内の各地方をこのどちらかに分類できるとか、全体を平面的に二分できるなどといっているのではないことである。既述のように各地方にはその自然条件に応じた微妙な垂直的秩序がありえ、たとえば東チベットの諸地方に、この二分法を適用するのは不適当である。そのため、ヒマラヤ主脈の周囲、おおよそ中央・西チベットとそれに南接するヒマラヤ南面一毛作高地においては有効な一つのマクロな分析概念として、これを位置づけておきたい。

3) ティンリー地方の社会

アジズによるティンリー地方の研究は、クンプとの社会・経済の比較や交易・人口移動による両地方のつながりに関して有益な手がかりを与えてくれる¹⁹⁾。それによれば、ティンリー地方の農村社会は、人口の上では大きく二つに分かれる。半分は自作農（政府納税人）であり、半分弱はドチュン（いわゆる農奴、奉公人）であった。自作農の一部は富農であり、それと役人が社会の上層にあった。それがおよそ人口の一割を占めていた。彼らの中には、ドチュンをたくさん抱え、数十頭ものヤクを持つものも少なくなかった。遠隔の地の使用権を持ち、多くの働き手を持つものにとっては、遊牧地帯でヤク群を保有し続けることは不可能ではなかったのである。チベット一般と同じく、支配者層は、いったん通婚によってドチュンの身分に落ちると、元の身分を取り戻しがたかったため、一般の農村ではドチュンとの通婚はさほど多くはなかった。

しかし、この地方の政治と交易の中心であった町、ガンカルでは、そういう訳でもなかった。ガンカルは、チベット・ネパールの長距離交易路の、国境の手前の交易センターであり、チベット各地からの、またネパール・カシミール・中国など、外国の商人や軍人が多くいた。多くの長距離交易のルートはここを通過しており、クンプルートは比較的小さなものの一つであった。ガンカルの人口構成の特徴は、これらの外来者が多いことほかに、一般農村に比してドチュンの数が多いことであった。また、ネパール国境へ逃亡し易いことから、チベット国内の犯罪者や逃亡者まで多く集まる結果となっていた。地方の中の政治経済の中心であることに加え、国境近くの交易・軍事・逃亡拠点でもあったことによって、ガンカルではこの地方の様々な社会階層相互、あるいはそれと外国人との通婚が生じ、民族的に入り乱れ、接触・流入・流出の激しいところとなっていた。

この町の存在は、ドチュンたちにとって重要であった。一般農村でもより仕事やその情報が得やすかったのである。この地方の役人や富農はみな

多かれ少なかれネパールとラサの間の交易をしており、農・牧生産に不足がなくとも交易によってさらに富の拡大をはかることは普通であった。ドチュンが豊かになる場合にも、それらの行う交易の手助けや商店経営の手伝いを通して方法を学ぶことは重要であった。実際、初めは貧しくとも羊を飼って羊毛をとり、それをネパール側へと細々と交易しながら成功するドチュンも少なくなかったのである。ガンカルはティンリー地方の中でもっとも社会・経済変動の激しい集落であったが、ドチュンはそこを起点に活動し、彼らこそティンリー社会の中でもっとも社会的モビリティの高い階層をなしていたのである。

現在のナムチェ住民の話によれば、かつてはナムチェの人々が共有する交易のための滞在所が、ガンカルにはあった。そこを訪れた記憶を持つ人は少なくない。ちょうどナムチェがそうであったように、ガンカルではクンプのシェルバ族とチベット人（ドチュン）との通婚も多く行われていたという。ナムチェに似て、ガンカルはよそのもの、その地方内への流入路となっていたのである。交易を通じたナムチェとティンリー地方の関係は、ほとんど衰退したとはいえ現在でも残っている。多くはないが、許可をとって毎年ティンリーへ交易に出かける人が、数人だがナムチェには残っているし、ティンリーの農耕地帯の人も、グループをつくってナムチェに交易にやってくる。

以上のようなティンリー地方の社会経済的空間編成の様子は、クンプ地方のそれに類似している。ともにナムチェ、ガンカルという交易中心的集落があって、周囲の村々を「後背地」としている。交易中心的集落にはもっとも社会経済的モビリティの高い社会層が集住しており、彼らは交易や、異なる社会層・外国人との通婚によって富の獲得や社会的上昇をはかる。隣接地方とは、さらに同種の交易中心的集落と人的・経済的につながっている。このような核を中心に展開する地方的経済空間編成の秩序は、河谷農耕地帯の中に地方経済の核を持つ、河谷ユニットとでも呼ぶべき地理的単位が地方空間を形成するチベット文化地域全般に共通するのではないか。

6. おわりに

クンプのヤク牧畜の衰退は、ある程度異質の自然条件と生業空間編成を備えていたヒマラヤ北面との関係の中で、地方の生業全体が連動的に変質した過程であったといえるであろうが、やはり同質の自然環境を備え、いまだにほぼまったくゾが進入しておらず豊かなヤク牧畜を保持したままのブータンのラサとの格差は激しい。乳、肉、毛などすべての点でラサでは今でもヤクの利用度は高い。湿潤なヒマラヤ南面高地に伝統的なヤク牧畜を保持したままの農牧兼業様式をラサにみると、クンプにおけるゾの持つ意味は大きい。この変化は、チベット全域の経済におけるヤク牧畜の占める意味を失わせ、地方内・地方間の新たな経済秩序を生むもののようにも思われる。

さてこれまで述べてきたことは、図7のとおりまとめることができる。ゾの有無を主たる区切りにして伝統（ヤク）と変容（ゾ）をとらえてきたといえるからである。家族メンバーによる生産－自給を想定すれば、ヒマラヤを境にした北面の乾燥チベットでは、その自然条件のために、かつてよりヤク牧畜を行う遊牧地帯と大麦耕作を行う農耕地帯とが、上下二層にほぼ分化していたと考えられる（AとC）。しかし南面の湿潤チベット（クンプ地方）では両者を兼業（Bのなかでも特にc～e）することが可能であった。

このクンプ地方における農牧兼業による生業の相互補完（可能）性は「湿潤チベット」という特質と相俟って、ヤクが本来「乾燥チベット」で持っていた意味を曖昧なものにしてしまう。そのような条件のもとでヤクの運搬機能と搾乳への機能的特化としてのゾ化が生じ、生業的伝統の変容が起こった。とりわけナムチェで特徴的な牝ヤクの運搬機能を特化させる意味での牝ゾ化がその方向性を示しているように、それは半農半牧から農耕・交易へと接近することであった（BからCへ）。

家畜種構成の分析によって、このヤク牧畜の現代的崩壊過程の諸例はおおよそ把握した。しかし、ヒマラヤ北面に関しては調査不足であって、現在の時点でしか事例を概観できておらず、ゾのいな

図7 これまでの議論のまとめ

	湿潤チベット ヒマラヤ南面高地 クンプ地方	乾燥チベット ヒマラヤ北面高地 中央・西チベット
伝統的 生業	半農半牧 (B: c ~ e) (♂♀ヤク有牛無)	遊牧 (A: a ?) (♀ヤク有牛無) と 農耕 (C: e ~ i ?) (♀ヤク無♂♀牛有)
伝統 の変容	農耕 (と交易) (B, C: c ~ i) (ヤク有♂♀ゾ有牛有)	遊牧 (A: b ないし a) (♀ヤク有ゾ? 牛無) と 農耕 (C: e ~ i) (♀ヤク無ゾ有牛有)

いときのこととは図7においても推測でしかない。ここでは、ヤクとゾについて若干の考察を加えて稿を終えたい。

ユーラシアの農牧混交地域の多くでは、農牧両部門間の技術的連関よりも、空間的・社会的な連関がはかられている。歴史を振り返れば、農耕に比べて牧畜は衰退してきたのであり、農耕地帯を中心として地方経済が統合されるなか、地域間の経済依存関係も強まって経済の地方的自立性は弱まってきたといえる。これを整理すれば、地方経済の統合とは、技術・空間・社会の諸側面で農耕が牧畜を引きつける農牧連関を進めることであり、地方間の経済統合とは、農耕地帯と農耕地帯の間の争い、いわば農農連関とでもいうべき地方間の経済関係が進行したのだ、といえる。つまり、農牧混交地域の一般的な歴史の展開は、農耕に対する牧畜の衰退、そして交易によって地方経済が孤立性・自給性を喪失するという二つの方向でとらえられる。クンプでのヤク牧畜の衰退過程でゾが担ってきた意味はその双方を示すものであった。農用に便利な家畜への転換は、乳をとるための牝牛、牝ゾの獲得であり、これによって農耕へと

「ヤク牧畜」を引きつけることができた。輸送力および商品獲得目的への家畜種の転換は、牝ゾの生産と交易、牝ヤクのための保有への移行であった。これによって、集落・地方を結ぶ連関が進められたのである。このように、ゾは地方内、集落内でヤク牧畜をより農耕へ引きつけ、地方間、集落間の機能関係をつくる役割をはたしていたのだ。この二つの方向への変化はティンリーでも同種の想定をすることは可能だが、そこでは羊を見逃さないであろう。

ヒマラヤ南北の高地に広まるヤクとゾの移動・滞在限界をきめるのは、乾湿度ではなく主として温量であった。両方ともヒマラヤの境界を越えた。しかし、両者の果たした役割は違ったのである。ヤクの出現・伝播は、とにかく雪線に近い最高所の草原を利用しうるものに変えた。文化的価値観に影響を与え、チベット文化地域の生業や物質文化の等質性をつくる基礎となった。一つの気象境界を越えた「チベット」を形成するには多大な役割を果たしたのであろう。しかしゾが果たしうるような、農耕を中心とした集落・地方秩序の形成や集落間地方間の機能関係の形成には、なじまな

い家畜だったのだ。

ヒマラヤ北面の乾燥チベットにおけるヤクから、南面の湿潤チベットにおけるその雑種であるゾへの変化という事態のなかに同じチベット系住民の生態適応の過程をあとづけてきた。このような家畜種の変化がチベット世界の同質性と異質性をつくりだしてきた一つの重要な要因であったといえるだろう。

注と文献

- 1) J.F.Downs and R.B.Ekval, *Animals and Social Types in the Exploitation of the Tibetan Plateau*, in "Man, Culture and Animals", ed. by Anthony Leeds and Andrew P. Vayda, American Association for the Advancement of Science, Washington. 1965, pp. 169-184.
- 2) 川喜田二郎、「チベット文化の生態学的位置づけ」、川喜田・梅棹・上山（編）『人間-人類学的研究- 今西錦司博士還暦記念論文集』、中央公論社、1966, 289-342頁。
川喜田二郎「中部ネパールヒマラヤにおける諸文化の垂直構造」、『季刊人類学』8(1)、1977、13-14頁。
- 3) チベットの牧畜および家畜種に関して読んだ文献のうち特に主要なものをあげると次の通りである。
R.W. Phillips, I.A. Tolstoy and R.G. Johnston, *Yak and Yak-Cattle Hybrids in Asia*, "Journal of Heredity", 37, 1946, pp. 162-170, 206-215.
R.B. Ekvall, "Fields on the Hoof", Waveland Press, Illinois. 1968.
R.P. Palmieri, "Domestication and Exploitation of Livestock in the Nepal Himalaya and Tibet: An Ecological, Functional, and Culture-Historical Study of Yak and Yak Hybrids in Society, Economy and Culture", Unpublished Ph.D. Dissertation, University of California. 1976.
G.E. Clarke, *China's Reforms of Tibet, and their Effects on Pastoralism*, "Kailash", 14(1-2), pp. 63-131, 1988.
- 4) 河口慧海『第二回チベット旅行記』講談社学術文庫、244-245頁。
- 5) 小林茂「ネパール・ヒマラヤのヤク-ウシ雑種生産」、福井勝義・谷泰（編）『牧畜文化の原像』日本放送出版協会、1987, 207-244頁。
- 6) Sarat Chandra Das, "A Tibetan-English Dictionary", Calcutta, 1902.
- 7) たとえば、Tshung-Lien Shen and Shen-Chi Liu, "Tibet and the Tibetans", Stanford University Press, 1953, pp. 131-132.
- 8) R.B. Ekvall 前掲書(1968), pp. 1-2.
- 9) 河口慧海、『第二回チベット旅行記』、講談社学術文庫、1981, pp. 246-248.
楊仲華、『支那西康事情』、誠文堂新光社、1941, pp. 115-120.
R.B. Ekvall, *Some Differences in Tibetan Land Tenure and Utilization*, "Sinologica", 1, 1954, pp. 39-48.
J.F. Downs and R.B. Ekvall 前掲論文(1965)
R.P. Palmieri 前掲論文(1976)
- 10) R.B. Ekvall, *Demographic Aspects of Tibetan Nomadic Pastoralism*, in "Population Growth: Anthropological Implications", ed. by Brian Spooner, MIT Press, 1972, pp. 269-285.
- 11) 表の情報は以下の文献から得た。
合田濤「チベット族の社会と生活」、神戸大学西蔵高原学術登山隊（編）『天帝の峰に挑む』神戸新聞総合出版センター、1988, 230-246頁。
松原正毅『青蔵紀行』中央公論社、1988。
ユーリ・レーリヒ『アジアの奥地へ』下巻、連合出版、1985。
玉村和彦『聖山巡礼』山と溪谷社、1987。
河口慧海 前掲書『チベット旅行記』各巻
Eva K. Dargyay, "Tibetan Village Communities", Vikas, New Delhi, 1982.
朝日教之『東チベット横断紀行』山と溪谷社、1988。
Hans Stübel, "The Mewu Fantzu: A Tibetan Tribe of Kansu", HRAF Press, 1958.
高山龍三「トルボ地域の農牧チベット人経済」『民族学研究』24(3), 1060, 23-59頁。
Dhondub Choeden, "Life in the Red Flag People's Commune", The Information Office of His Holiness the Dalai Lama, 1978.
Melvyn C. Goldstein, *Tibetan Speaking Agro-Pastoralists of Limi*, *Objets et Mondes*, 14(4), 1974, pp. 259-268.
J.F. Downs, *Livestock, Production, and Social Mobility in High*

- Altitude Tibet,"*American Anthropologist*",vol.66(1964), pp.1115-1119.
- R.B.Ekvall 前掲書(1968)
- 12) R.B.Ekvall 前掲書(1968),pp.18-19.
- G.E.Clarke 前掲論文(1988),p.81.
- 13) 鹿野勝彦「ヒマラヤ高地の移牧—高地シェルパの例を通して—」『民族学研究』43(1),1978,85-97頁。
- 14) 小林茂 前掲論文218-219頁。
- 15) Christoph von Furer-Haimendorf,"Himalayan Traders", John Murray Ltd.,London.1975.pp.43-48.
- 16) Christoph von Furer-Haimendorf,"The Sherpas of Nepal", Oxford Book Co.,Calcutta,1964. p.27.
- Michael Oppitz,"Geschichte und Socialordnung der Sherpa",Innsbruck,1968,p.100.
- 17) Christoph von Furer-Haimendorf 前掲書(1964),pp.18-38.
- Michael Oppitz,Myths and Facts: Reconsidering some Data concerning the Clan History of the Sherpa, in Christoph von Furer-Haimendorf ed., "Contributions to the Anthropology of Nepal",Aris & Phillips Ltd.,Warminster, England,1974. pp.232-243.
- Ngawang Tenzin Zangbu and Frances Klatzel,"Stories and Customs of the Sherpas",Kathmandu,1988.
- 18) 中川潔「チベットの生活と文化」,京都大学学士山岳会『カンベンチン』毎日新聞社,1983,125-135頁。
- 齊藤清明『チベット旅情』芙蓉書房,1983,199-239頁。
- 19) Barbara Nimri Aziz,"Tibetan Frontier Families",Vikas Publishing House,New Delhi,1978.
- なお文中、前稿(月原)は月原敏博、「観光と交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノートから—」『ヒマラヤ学誌 第1号』、前稿(古川)は「ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート」『同』、をさしている。